
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第94集

深谷市内遺跡 XV

— 熊野遺跡第114次調査 —

2008.3

深谷市教育委員会

深谷市内遺跡 XV

— 熊野遺跡第114次調査 —

2008.3

深谷市教育委員会

序

埼玉県北部に位置する深谷市は、平成18年1月に深谷市・岡部町・川本町・花園町との合併により新たなスタートを迎えることとなりました。合併後の深谷市は、北部に利根川、南部に荒川が流れ、変化に富んだ地形や豊富な農産物があり、自然の恵み豊かな土地柄を有しています。

ここには、先人たちの残した足跡が、埋蔵文化財として今なお多く眠っております。なかでも、縄文時代晩期から弥生時代初期の土器を出土した四十坂遺跡・上敷免遺跡や、古代榛澤郡・幡羅郡の役所と推定される中宿・幡羅遺跡などは、埼玉県の原始・古代を考える上で欠かすことのできない遺跡と言えるでしょう。

深谷市では、こうした貴重な遺跡群を保護するために鋭意努力し、破壊を免れない場合は、記録保存のための発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成9年度に個人住宅建設に先立ち実施した熊野遺跡第114次調査の成果をまとめたものです。発掘調査では、奈良～平安時代の竪穴住居跡をはじめ、掘立柱建物跡等が検出されました。各遺構からは豊富な遺物が出土しており、地域史解明の上では、大きな成果を得られたものと確信しています。

本書が学術・教育関係はもとより、文化財に対する保護・保存の啓蒙・普及を図る資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成まで、多大なるご理解とご協力を賜りました関係各位・諸機関に心より御礼申し上げます。

平成20年3月

深谷市教育委員会
教育長 猪野幸男

例 言

1. 本書は、熊野遺跡第114次調査の発掘調査報告書である。なお、発掘調査箇所の地番は深谷市岡宇立堀1932-7番地である。
2. 発掘調査は、個人住宅建設を原因とする。発掘調査担当者は鳥羽政之である。文化財保護法第57条の2（現行第93条）に基づく土木工事等のための発掘に関する届出は平成9年9月3日付文第532号にて、同法第98条の2（現行第99条）に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知は、平成9年9月3日付文第533号にて岡部町教育委員会から埼玉県教育委員会へ進達した。
3. 発掘調査は、平成9年8月28日から平成9年9月19日にかけて実施した。
4. 本書の執筆・編集は鳥羽政之が行い、出土品の実測図・観察表は、竹野谷俊夫が作成した。
5. 本書に掲載した資料は、深谷市教育委員会が保管している。
6. 本書の刊行に関わる組織は、以下のとおりである。

（事務局）

深谷市教育委員会教育長	猪野幸男	主任	知久裕昭
教育次長	石田文雄	主事	幾島 審
次 長	中村信雄	臨時職員	栗原貴世実
生涯学習課長	澤出晃越	（整理作業）	
主 幹	武井 茂	臨時職員	竹野谷俊夫
文化財保護係長	古池晋禄	”	黒澤 恵
主 査	森下昌市郎	”	佐藤由江
”	鳥羽政之	”	布施みゆき
”	高村敏則	”	伊藤万里子

凡 例

1. 発掘調査位置図は岡部町都市計画図（1/2,500）を、遺跡分布図は国土地理院発行『本庄』（1/25,000）を使用した。
2. 遺構実測図は、現場では基本的に1/20、カマド実測図を1/10とし、本書掲載の段階で1/60及び1/30とした。遺物については、基本的に1/3で掲載した。
3. 図中の方位は、座標北を示す。
4. 遺物観察表の数値に（ ）のあるものは推定値、《 》のあるものは残存値を示す。
5. 土層断面図及びエレベーション図のスクリーントーン（斜線）は、地山を示す。また、図中の数値は、標高値を示す。

目次

序

例言・凡例

I 発掘調査の経緯及び経過	
1. 発掘調査の経緯	1
2. 発掘調査・整理報告の経過	1
II 遺跡の地理・歴史的環境	4
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	4
III 発見された遺構と遺物	8
1. 熊野遺跡の概要	8
2. 発見された遺構と遺物	8
IV 考察	32

挿図目次

第1図	熊野遺跡の範囲と調査地点	2	第20図	3号住居跡出土遺物	24
第2図	発掘調査地点位置図	3	第21図	4号住居跡及びカマド実測図	25
第3図	熊野遺跡と周辺の遺跡	5	第22図	4号住居跡遺物分布状況	25
第4図	熊野遺跡114次調査全測図	7	第23図	4号住居跡出土遺物(1)	26
第5図	1号住居跡実測図	9	第24図	4号住居跡出土遺物(2)	27
第6図	1号住居跡遺物分布状況	10	第25図	5号住居跡遺物分布状況	27
第7図	1号住居跡出土遺物(1)	11	第26図	5号・6号住居跡実測図	28
第8図	1号住居跡出土遺物(2)	12	第27図	5号住居跡カマド実測図	28
第9図	1号住居跡出土遺物(3)	13	第28図	5号住居跡出土遺物	29
第10図	2号住居跡実測図	15	第29図	1号掘立柱建物跡出土遺物	30
第11図	2号住居跡遺物分布状況	16	第30図	1号掘立柱建物跡実測図	31
第12図	2D号住居跡カマド実測図	17	第31図	2号掘立柱建物跡実測図	31
第13図	2E号住居跡カマド実測図	17	第32図	3号掘立柱建物跡実測図	31
第14図	2号住居跡出土遺物(1)	18	第33図	熊野遺跡における北武蔵型 暗文土師器坏の法量分化と変遷	34
第15図	2号住居跡出土遺物(2)	19	第34図	熊野遺跡131次調査1号住居跡	35
第16図	2号住居跡出土遺物(3)	20	第35図	熊野遺跡108次調査1号住居跡	35
第17図	2号住居跡出土遺物(4)	21	第36図	熊野遺跡A区2号特殊土坑	35
第18図	3号住居跡実測図	22			
第19図	3号住居跡遺物分布状況	22			

写真図版

図版 1

発掘調査前の状況
表土掘削の状況
A区全景(北西から)
A区全景(南東から)
1号竪穴住居跡
1号竪穴住居跡遺物出土状況(1)
1号竪穴住居跡遺物出土状況(2)
2号竪穴住居跡完掘状況

図版 3

4号竪穴住居跡遺物出土状況(1)
4号竪穴住居跡遺物出土状況(2)
5号、6号竪穴住居跡完掘状況
5号竪穴住居跡カマド
5号竪穴住居跡遺物出土状況
5号竪穴住居跡刀子出土状況
1号掘立柱建物完掘状況
2号掘立柱建物完掘状況

図版 5

1号竪穴住居跡No.24
1号竪穴住居跡No.29~34
2号竪穴住居跡No.1
2号竪穴住居跡No.3
2号竪穴住居跡No.4
2号竪穴住居跡No.5
2号竪穴住居跡No.7
2号竪穴住居跡No.9
2号竪穴住居跡No.11
2号竪穴住居跡No.12

図版 7

3号竪穴住居跡No.7
3号竪穴住居跡No.9
3号竪穴住居跡No.11
4号竪穴住居跡No.1
4号竪穴住居跡No.5
4号竪穴住居跡No.7
4号竪穴住居跡No.8
4号竪穴住居跡No.11
4号竪穴住居跡No.12
4号竪穴住居跡No.13

図版 2

2E号竪穴住居跡カマド
2E号竪穴住居跡カマド右袖周辺
2D号竪穴住居跡カマド
2号竪穴住居跡遺物出土状況
2E号竪穴住居跡遺物出土状況
2E号竪穴住居跡遺物出土状況
3号、4号住居跡完掘状況
4号住居跡完掘状況

図版 4

1号竪穴住居跡No.1
1号竪穴住居跡No.2
1号竪穴住居跡No.3
1号竪穴住居跡No.5
1号竪穴住居跡No.6
1号竪穴住居跡No.7
1号竪穴住居跡No.12
1号竪穴住居跡No.13
1号竪穴住居跡No.14
1号竪穴住居跡No.19

図版 6

2号竪穴住居跡No.18
2号竪穴住居跡No.23
2号竪穴住居跡No.24
2号竪穴住居跡No.26
2号竪穴住居跡No.32
2号竪穴住居跡No.37
3号竪穴住居跡No.1
3号竪穴住居跡No.3

図版 8

4号竪穴住居跡No.15
4号竪穴住居跡No.17
4号竪穴住居跡No.18
4号竪穴住居跡No.20
5号竪穴住居跡No.2
5号竪穴住居跡No.4
5号竪穴住居跡No.5
5号竪穴住居跡No.7
5号竪穴住居跡No.8
5号竪穴住居跡No.8内面の墨書

I 発掘調査の経緯及び経過

1. 発掘調査の経緯

埼玉県北部に位置する深谷市は、埋蔵文化財の宝庫として古くから知られてきた。特に、縄文時代草創期の土器が採集された西谷遺跡や、弥生文化波及期の遺跡として名高い四十坂遺跡・上敷免遺跡・国重要文化財に指定された緑釉手付瓶を出土した西浦北遺跡など、豊富な内容を有す。

熊野遺跡は、JR岡部駅の北東1kmにあり、国道17号線沿線に所在する。標高は50～55m程である。遺跡の範囲は南北750m、東西1,400mと広大であり、発掘調査では、多種・多様な遺構群が検出されている。熊野遺跡の第1次調査は、昭和52～53年度にかけて岡部西小学校建設に先立ち実施されており、当遺跡が、古代榛澤郡において拠点の遺跡となることが確認されている。

今回報告する発掘調査は、平成4年度以降実施した調査のうち114次調査としたものである。以下、発掘調査の経緯について記す。

平成9年8月20日、深谷市岡字立堀1932-7番地の個人専用住宅建設に先立ち、開発予定地内の埋蔵文化財の有無について深谷市教育委員会（旧岡部町）へ事業者である矢内英一氏（以下、事業者と記す。）より照会がなされた。当教育委員会では、現地において土師器・須恵器等の細片が散布していることを確認の上、照会地内は、熊野遺跡（埼玉県遺跡登録番号63-017）の範囲内にあたること、開発にあたっては、文化財保護法第57条の2（現行93条）に基づく埋蔵文化財発掘の届出が必要であることを伝えた。

事業者は、平成9年8月25日付で埋蔵文化財発掘の届出を当教育委員会に提出した。当教育委員会では、埋蔵文化財の詳細を確認するため埋蔵文化財確認調査を平成9年8月28日に実施した。調査では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡等が検出された。確認調査当日、事業者との協議を行い事業計画の変更は避けられないとの結論に至り、発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなった。

教育委員会では、確認調査を発掘調査へと切り替え、平成9年9月3日付けで、文化財保護法98条の2第1項（現行99条）による埋蔵文化財発掘調査の通知を埼玉県教育委員会に提出した。

発掘調査は、平成9年8月28日～9月19日まで

の期間実施された。

2. 発掘調査・整理報告の経過

(1) 発掘調査の地番等

本報告は、熊野遺跡114次調査として実施したものである。発掘調査の原因は、個人専用住宅の建設である。

調査地点の地番は、岡部町（平成9年当時、以下深谷市と記す）岡字立堀1932-7番地である。発掘調査面積は、184㎡である。

(2) 表土除去

発掘調査は、8月28日から着手した。当初、確認調査として実施し、工事着手予定日が迫っていることから、確認調査で遺構の存在が明確となった時点で、発掘調査に切り替えた。作業は、まずバックホーによる表土除去から始めた。確認面である黄褐色ローム層上面までの深さは、30cm程を測る。調査区は、建物建設予定地周辺をA区、通路のための造成予定地周辺をB区とした。

(3) 遺構確認

表土除去に続き、遺構確認作業を実施した。A区では、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡3棟、ピット等が検出され、B区では、竪穴住居跡2軒、検出された。遺構確認には2日程を要した。

(4) 遺構掘り下げ及び図化作業

竪穴住居跡は、遺構の重複関係を確認しながら慎重に掘り下げを行った。土層断面を図化した後、床面を検出した段階で写真撮影及び図化を行った。遺物については、出土状態の写真撮影を行った。掘立柱建物跡、溝跡、土壇等も同様に行い、作業の全行程が終了したのは、9月19日のことであった。

(5) 整理・報告

整理作業は、水洗・注記を平成10年度中に終了した後、中断していた。

整理作業を平成19年度より再開し、4月～8月まで、遺物の復元、図面整理等を実施した。

その後、土器実測・観察表の作成については、平成19年10月中に終了した。11月より、遺構・遺物のトレース、図版作成作業等にとりかかり、この作業と併行して原稿執筆を行った。平成20年1月には、印刷・製本作業を開始し、報告書は、平成20年3月に刊行された。



第1図 熊野遺跡の範囲と調査地点

0 300m



第2図 発掘調査地点位置図

II 遺跡の地理・歴史的環境

1. 地理的環境

荒川以北の深谷市域は、地形的には櫛挽台地、本庄台地、妻沼低地に大きく区分される。

櫛挽台地は、荒川左岸に広がる台地であり、荒川により形成された扇状地形を有する。西部は、藤治川・針ヶ谷堀周辺で本庄台地、山崎山丘陵と区分され、北端部は、福川右岸付近で妻沼低地と接する。妻沼低地と櫛挽台地の境界付近を東流する福川は、櫛挽台地扇端部の豊富な湧水を集めながら、深谷市北部域の農業用水として現在も重要な位置を占めている。

櫛挽台地の標高は、扇頂部にあたる寄居付近で100m程、扇端部は35～50m程である。また、当台地は、荒川の流路変更による段丘が発達し、その過程により、櫛挽面、寄居面に大別される。

櫛挽面は武蔵野面に対比され、深谷市東半をのせる。台地上には、藤治川、針ヶ谷堀川、西川、上唐沢川、押切川、下唐沢川等の中小河川が北流する。これらの河川は、扇央部から扇端部付近の湧水に端を発し、台地を北流する。一見平坦に見える台地上も、現存する中小河川や、その他の埋没谷による緩やかな起伏がある。

寄居面は、櫛挽面以降の段丘面である。櫛挽面とは、寄居高校付近から深谷市下郷、境、折之口、上宿へと連なる崖線で区分される。

この寄居面では、ローム層が比較的厚く堆積する段丘面と、その下位にありローム層の堆積が薄いか認められない段丘面に区分される。前者は、御威稜ヶ原面として別称される。境界の崖線付近では湧水が随所に認められる。さらに、寄居面以降には、川本明戸付近を扇頂とする荒川新扇状地が形成される。御威稜ヶ原面との境界付近及び扇端部付近は、熊谷市域の重要遺跡が集中する。

本庄台地に相当する地域は、深谷市西端の藤治川・針ヶ谷堀以西の地域（旧岡部町榛沢地区）である。台地上には、見馴川（小山川）・志戸川・女堀等の中小河川が北流しており、この河川の流域は、沖積底地となっている。

妻沼低地は、利根川及びその支流に展開する広大な低地帯である。南方で本庄台地及び櫛挽台地と接する。旧岡部町北部、旧深谷市北部が該当し、低地内では、中州的に微高地が形成され、この微高地上に遺跡が集中する。

この他、櫛挽台地と本庄台地の境界付近に山崎山（標高約117m）・諏訪山丘陵（標高約109m）、櫛挽面に仙元山丘陵（標高約98m）と呼称される残丘上の小丘陵が存在する。

一方、荒川以南は、旧川本町域南部が該当する。当地域の南半は、江南台地上にのる。江南台地も荒川の流路変更により形成された段丘面であり、扇状地形を有する。

扇頂部付近の寄居町木持では標高140m、扇端部の熊谷市原新田付近では標高45mを測る。この段丘面は、江南面と呼称され、櫛挽面以前のものである。江南面の下段には寄居面が存在する。この段丘面は、櫛挽台地側のそれと対応する。

江南台地上から下段の段丘面（寄居面）にかけて、荒川の支流である吉野川が東流及び北流し、その流域には狭小であるが沖積低地が存在する。

（引用・参考文献）

- | | | |
|------|------|-----------------------|
| 籠瀬良明 | 1975 | 「自然堤防」古今書院 |
| 川本町 | 1991 | 「川本町史一通史編」 |
| 埼玉県 | 1978 | 「埼玉縣市町村誌第14巻
一岡部町」 |
| 埼玉県 | 1986 | 「埼玉県史別編3一自然」 |
| 深谷市 | 1969 | 「深谷市史」 |
| 〃 | 1980 | 「深谷市史一追補編」 |
| 寄居町 | 1986 | 「寄居町史一通史編」 |

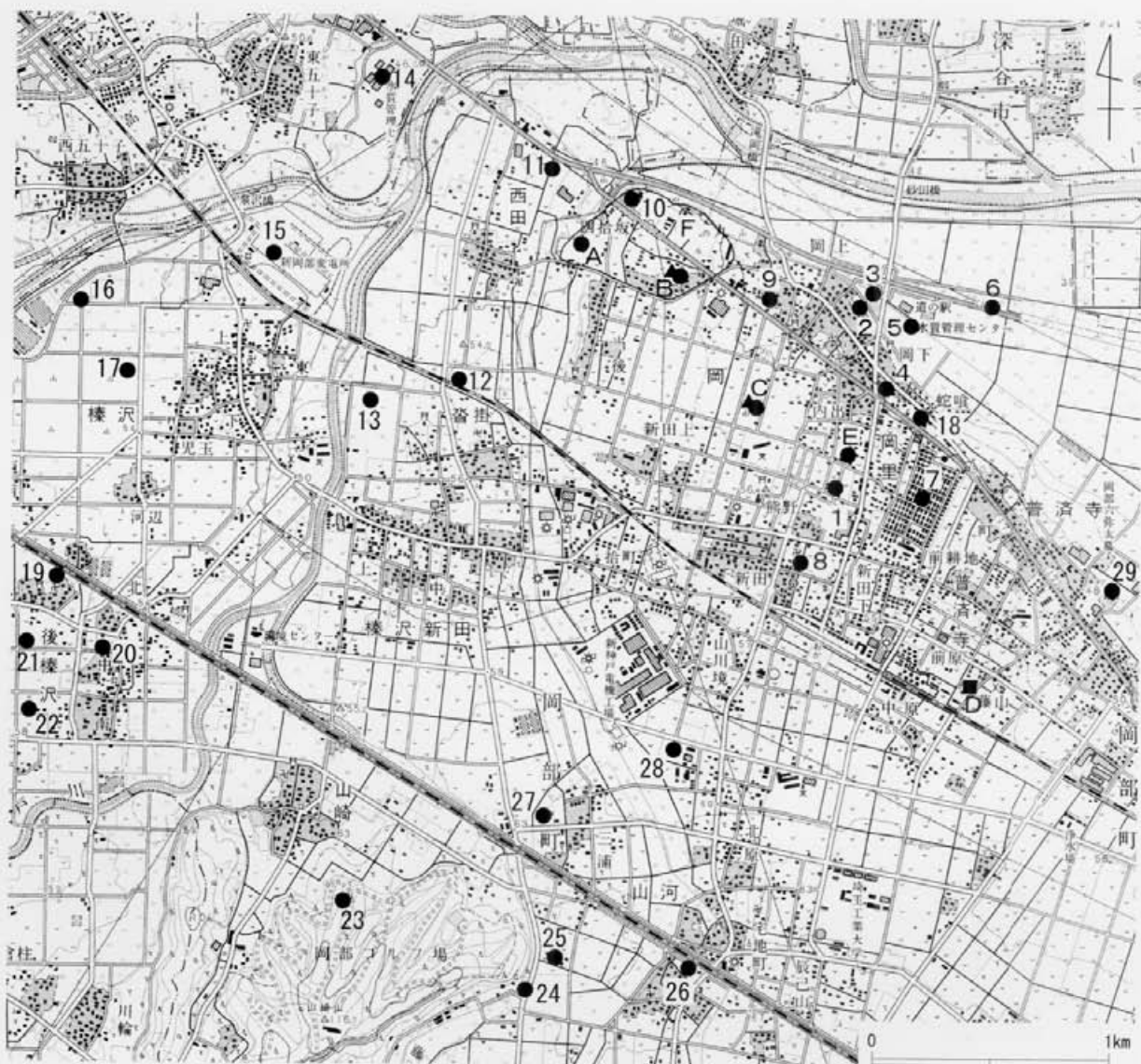
2. 歴史的環境

本項では、熊野遺跡と密接に関与すると推定される櫛挽台地北縁部から妻沼低地にかけての地域（福川上流域）の遺跡群の動向を概観する。

弥生時代では、四十坂遺跡、樋詰遺跡、森下遺跡、上敷免森下遺跡などで調査が行われている。

特に、四十坂遺跡、上敷免遺跡は、弥生時代前期末～中期にかけての土器群が検出された遺跡として著名である。この点は、当地域が弥生文化波及の先進的役割を果たしたことを示す。

古墳時代前期の遺跡は、矢島南遺跡、起会遺跡、戸森松原遺跡、深谷町遺跡がある。これらの遺跡は、比較的小規模で地域内において分散的である。また、該期の墳墓では、四十坂遺跡、上敷免遺跡で周溝墓が検出された。四十坂遺跡は、四十塚古墳群中にあり、古墳群の成立を考えるにあたり重要である。



- | | | | |
|-------------|----------------------|--------------|---------------|
| 1. 熊野遺跡 | (官衙・律令期集落・中世居館) | 19. 東光寺裏遺跡 | (縄文・平安集落) |
| 2. 中宿遺跡 | (郡衙正倉・律令期集落) | 20. 榎沢六郎成清館跡 | (中世) |
| 3. 滝下遺跡 | (河川跡・律令期集落) | 21. 石蒔遺跡 | (古墳～平安集落・周溝墓) |
| 4. 岡麩寺 | (寺院跡・古墳～律令期集落) | 22. 地神祇遺跡 | (古墳～平安集落) |
| 5. 岡部条里遺跡 | (古墳集落・条里水田・律令期居宅) | 23. 千光寺遺跡 | (古墳群・平安集落) |
| 6. 砂田前・樋詰遺跡 | (古墳～平安集落) | 24. 西谷遺跡 | (縄文・律令期集落) |
| 7. 白山遺跡 | (古墳群・律令期集落・中世居館) | 25. 茶白山遺跡 | (古墳群) |
| 8. 新田遺跡 | (律令期集落) | 26. 伝上杉館跡 | (中世) |
| 9. 上宿遺跡 | (縄文・古墳～律令期集落) | 27. 山河聖天社 | (中世) |
| 10. 四十坂遺跡 | (縄文集落・弥生再葬墓・周溝墓・古墳群) | 28. 西龍ヶ谷遺跡 | (律令期集落・中世居館) |
| 11. 原ヶ谷戸遺跡 | (縄文・古墳集落・古墳群) | 29. 伝岡部六弥太館跡 | (中世) |
| 12. 水窪遺跡 | (縄文・古墳集落・古墳群) | A. 四十坂浅間山古墳 | (円墳) |
| 13. 新井遺跡 | (律令期集落) | B. 寅稻荷塚古墳 | (前方後円墳) |
| 14. 東五十子遺跡 | (古墳・中世集落) | C. お手長山古墳 | (帆立貝式古墳) |
| 15. 六反田遺跡 | (古墳・中世集落) | D. 前原愛宕山古墳 | (方墳) |
| 16. 大寄遺跡 | (縄文・弥生～律令期集落) | E. 内出八幡塚古墳 | (円墳) |
| 17. 西浦北遺跡 | (縄文・古墳～律令期集落) | F. 四十塚古墳群 | (古墳群) |
| 18. 塚東遺跡 | (古墳～平安集落) | | |

第3図 熊野遺跡と周辺の遺跡

古墳時代中期では、遺跡は増加傾向にある。集落跡では、上敷免遺跡、森下遺跡、戸森前遺跡、起会遺跡、矢島南遺跡、岡部条里遺跡、砂田前遺跡等で、堅穴住居跡が検出されているが、いずれも小規模な集落跡と推定される。

墳墓では、戸森松原遺跡で、方墳～円墳にいたる古墳群が検出されている。中宿遺跡、四十坂遺跡でも該期の方墳が検出された。

古墳時代後期初頭には、集落の規模が拡大する現象を見て取ることができる。上敷免遺跡、森下遺跡、戸森前遺跡、起会遺跡、矢島南遺跡、樋詰遺跡、岡部条里遺跡、砂田前遺跡、中宿遺跡、上宿遺跡で堅穴住居跡が検出された。砂田前遺跡、上敷免遺跡は、大規模な集落跡である。

当地域の古墳群には櫛挽台地上の四十塚古墳群、白山古墳群が代表的である。四十塚古墳群は、前期～中期の墳墓群を経て後期古墳群へと展開する。古墳群中の四十塚古墳は、横板板鋸留短甲、五鈴付鏡板、鉄斧等が昭和初期に出土した。古墳築造時期は、5世紀末頃の年代が想定される。当古墳群展開の重要な画期を示す古墳である。

白山古墳群の開始年代については、榛名山二ツ岳の火山灰降下前に開始されていることは明確である。帆立貝式古墳である17号墳は、古墳群の中では唯一帆立貝の墳形を有す古墳であり、古墳群開始期のものと想定される。当古墳群の成立期は、近接する砂田前遺跡で集落が拡大する現象と重なることを勘案すると両者は、対応関係にあるものと想定する。

さらに6世紀後半頃には四十塚古墳群内に榛澤郡域最大級の寅稲荷塚古墳（前方後円墳・51m）が築造されることから、当地域の優位性が確認できる。その後、四十塚古墳群から、やや距離を置き、お手長山古墳（帆立貝式古墳・49.5m）、内出八幡塚古墳（円墳33m）、愛宕山古墳（方墳・37

m）と有力な古墳が築造される。この点は、榛澤評家成立の前提となるものであろう。

妻沼低地側の古墳群では戸森古墳群、上敷免古墳群が存在するが、内容については明確ではない。

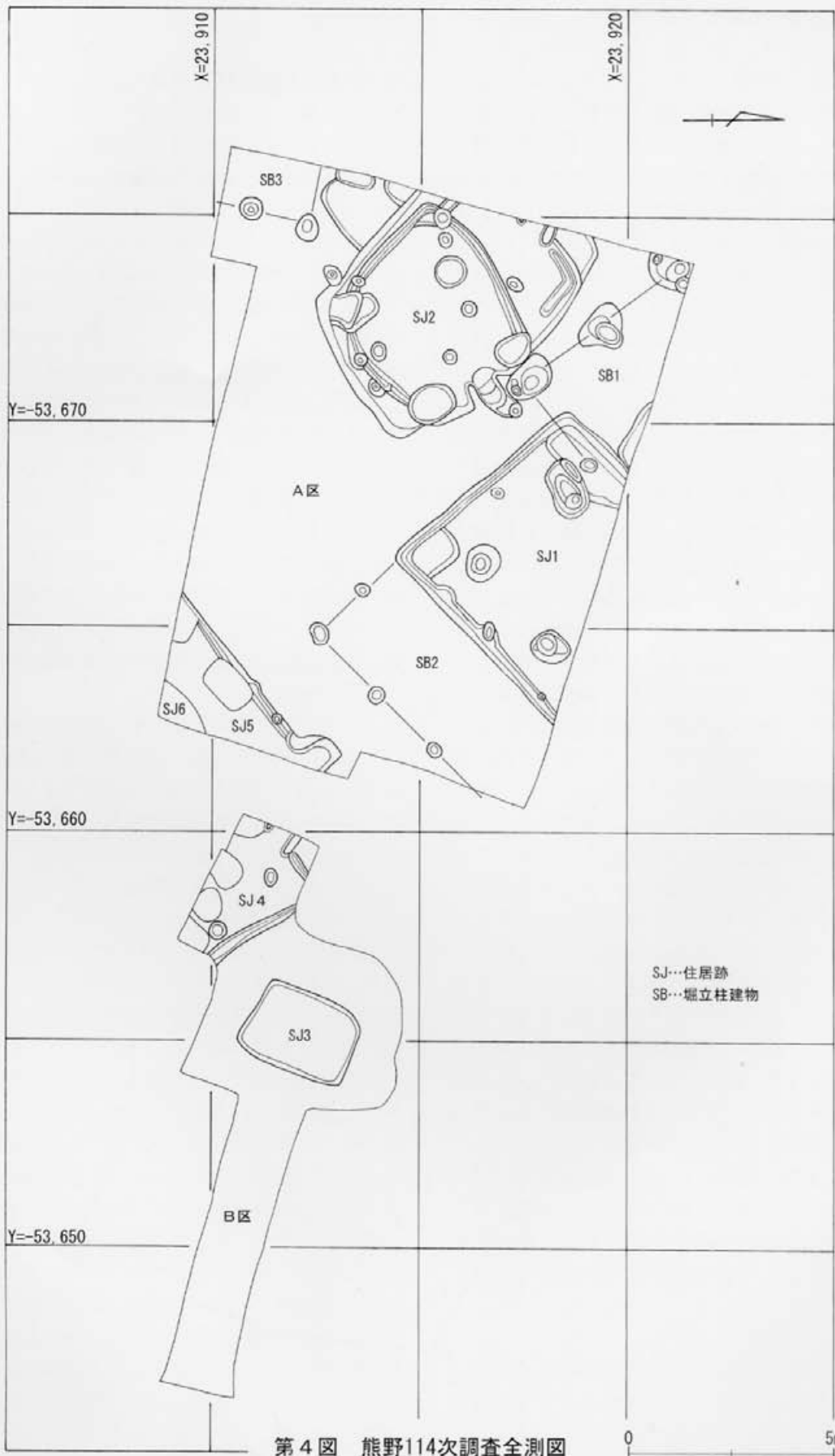
7世紀後半段階では、櫛挽台地北縁に榛澤評家が形成される。その原動力となったのは、古墳時代後期に有力墳墓を築造した在地首長層である。成立時期は、7世紀第3四半期頃であり、熊野遺跡内で検出された遺構群等が、評家を構成する施設群である可能性が高い。熊野遺跡では、大型建物群、連房式鍛冶工房、石組井戸等の大規模な遺構群が7世紀第3四半期～第4四半期にかけて成立・展開する。これとともに、畿内の土師器坏Cを模倣して成立したと想定される在地産暗文土器や、末野産須恵器による豊富な食器組成が目目を引く。

この時期、白山、上宿、新田等の諸集落が新規に出現するか、規模を拡大する。

中宿遺跡では、7世紀末～8世紀初頭以降大規模な倉庫群が出現し、榛澤郡正倉と考えられる。さらに台地直下の滝下遺跡では大溝（滝下河川跡）の掘削が開始される。郡庁院については、中宿遺跡南方の地点が有力であるが、現状では調査できない状況である。

8世紀前半では、中宿遺跡の東方に岡廃寺が建立される。岡廃寺は、9世紀第1四半期まで存続するが、この段階以降、寺域に堅穴住居跡が進出する。8世紀中頃から後半にかけて低地部に条里型地割が存在する。また、低地部の集落遺跡としては砂田前遺跡、矢島南、岡部条里、樋詰、起会、戸森前、森下遺跡、上敷免遺跡などがあげられる。

中宿遺跡正倉群周辺には10世紀後半～11世紀代にかけて堅穴住居跡が進出することから、この頃には正倉の機能は完全に失われていたものと思われる。



第4図 熊野114次調査全測図

Ⅲ 発見された遺構と遺物

1. 熊野遺跡の概要

熊野遺跡は、深谷市の北西に位置する。JR岡部駅の北東1kmにあり、国道17号線沿線に所在する。遺跡の規模は、南北750m、東西1,400mを測る。標高は、50～55m程であり、南から北へ向かい緩やかな傾斜を有する。また、南北方向の埋没谷が複数地点で確認できることから、当時の地形は、現在より起伏を有していたと考えられる。

周囲には、中宿遺跡、白山遺跡、岡廃寺、岡遺跡、上宿遺跡等が存在し、これらの遺跡群により榛澤評・郡家が構成される。

発掘調査は、昭和52～53年にかけて岡部西小学校建設に伴い実施されたものを嚆矢とする。

その後、平成4年度から岡中央土地区画整理事業及びその周辺地域において発掘調査が激増する。平成4年度以降、現在まで深谷市(旧岡部町)教育委員会(註1)で実施された発掘調査は、163次を数える。さらに、平成6～7年度には埼玉県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が実施されている(熊野A～D区として報告書刊行済)。

このうち、岡中央土地区画整理事業地内における遺構群については特徴的なあり方が見える。遺構群は、複数のまとまりに大別され、それぞれにおいて異なる内容を有している。遺跡内には三箇所において道路遺構が検出されており、道路の沿線に各ブロックが点在する状況が確認できる。

遺構群の成立期は、7世紀第3四半期と考えられ、7世紀代の遺構・遺物群は豊富である。

特に岡中央土地区画整理事業地内における1次調査では桁行7間×梁行3間の大型建物を中心とするブロックがあり、熊野遺跡の中核部と考えられる。また、7次調査区の大型石組井戸、31次調査区の連房式鍛冶工房等が熊野遺跡の7世紀代を象徴する建物群である。

さらに、131次調査区では、熊野遺跡最古(7世紀第3四半期)と考えられる畿内産土師器・在地産土師器・須恵器等が出土した。これらの土器群の組み合わせは、当地域の編年的指標となるものである。

(註1) 調査回数には、岡部町遺跡調査会(平成17年12月をもって解散)主体の発掘調査も含まれている。

2. 発見された遺構と遺物

(1) 概要

熊野遺跡114次調査において検出された遺構は、堅穴住居跡6軒、掘立柱建物跡3棟、ピット等である。

検出された住居跡のうち最古のものと考えられるのは、1、2号住居跡である。いずれの住居跡も7世紀末～8世紀初頭と考えられ、土器類(土師器・須恵器)が豊富に出土している。4～6号住居跡は、8世紀後半代を中心とする時期のものである。各住居跡とも遺構の大半が調査区域外に延びている。3号住居跡は、小型であり、カマドを持たない。各堅穴住居跡の主軸方位は、時期の離れた3号住居跡を除き、近似していることから、7世紀末～8世紀段階では、堅穴住居の建設に際して規制があった可能性がある。また、該期の住居跡群の主軸方位は、岡中央土地区画整理地内で検出された道路遺構の走行方位に直交するか、それに近い形をとっており道路遺構と密接な関係を有するものである。

この他、掘立柱建物跡は堅穴住居跡に壊されていること、遺構の大部分が調査区域外に延びていることから全体像は明確ではない。1～2号建物跡は住居跡との切りあい関係から、遺跡成立期の7世紀後半段階まで遡る可能性がある。

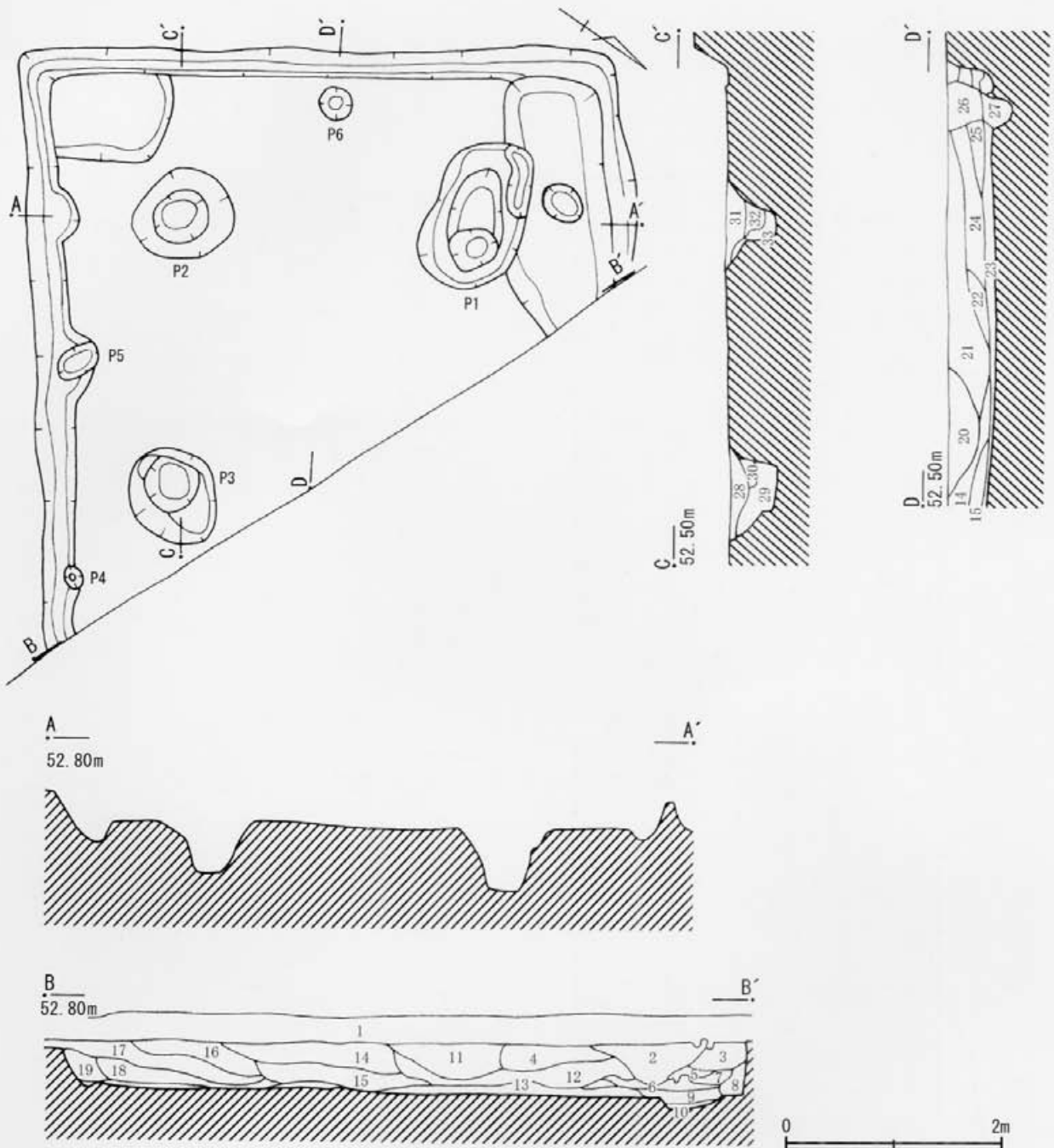
(2) 発見された遺構と遺物

【1号堅穴住居跡】

A区北端に位置する。1号建物跡と重複関係にあり、本住居跡が新しいことが確認されている。住居跡北半は、調査区域外に延びているため全体像は不明である。

遺構の規模は、長軸5.70m以上、短軸5.70mであり、平面形は長方形を呈すると想定される。主軸方位は、N-52°-Eである。住居跡の各コーナー部は、直角に近い形をとる。確認面から床面までの深さは48cm程である。

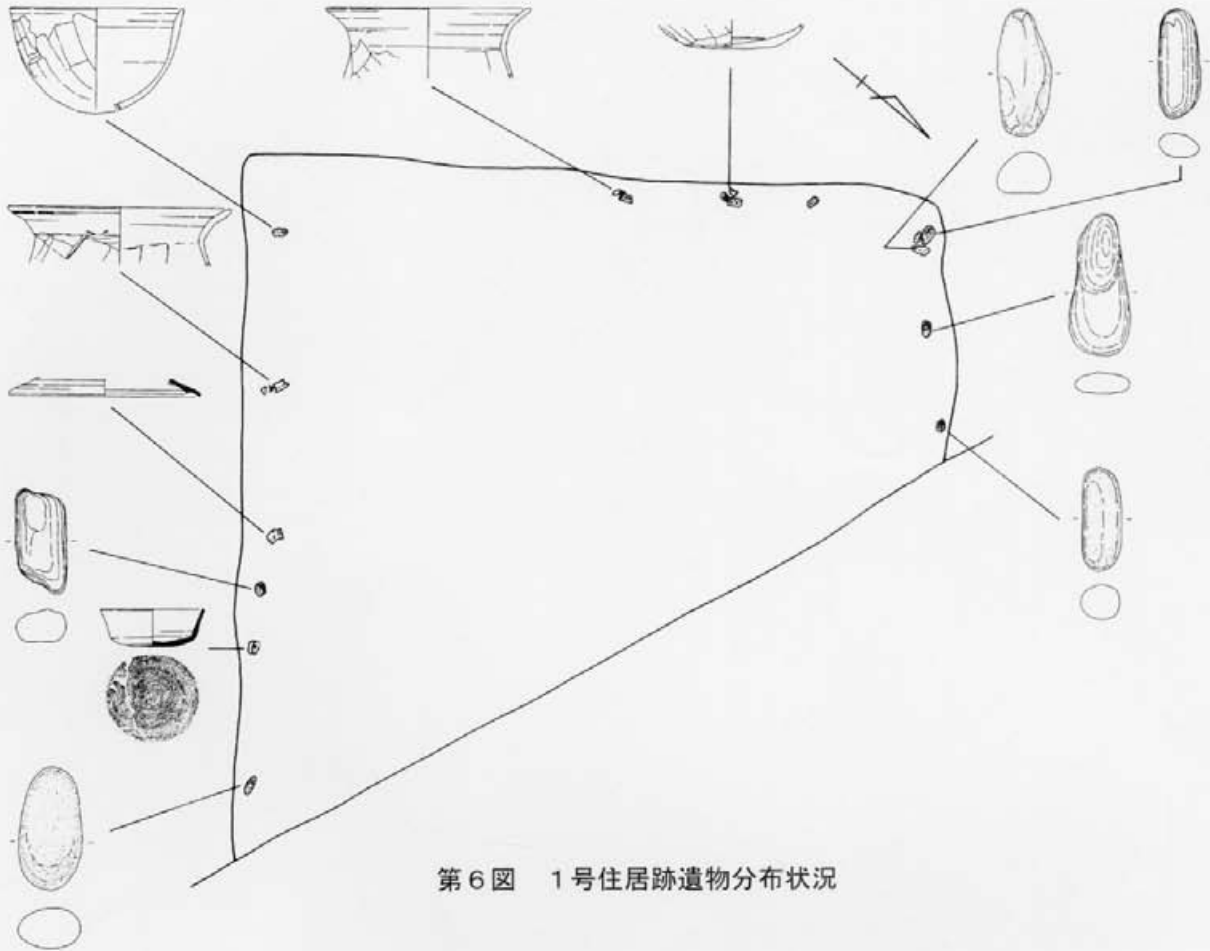
柱穴は3箇所において検出されており、比較的深い掘り込みを有する。P1は、1号掘立柱建物跡の上層にある。長軸144cm、短軸90cmの楕円形を呈する。床面からの深さは60cmである。P2は、住居跡南東部に位置する。長軸93cm、短軸81cmであり、円形に近い形をとる。床面からの深さは51cmである。P3は、住居跡北東部に位置する。



第5図 1号住居跡実測図

1号住居跡土層説明

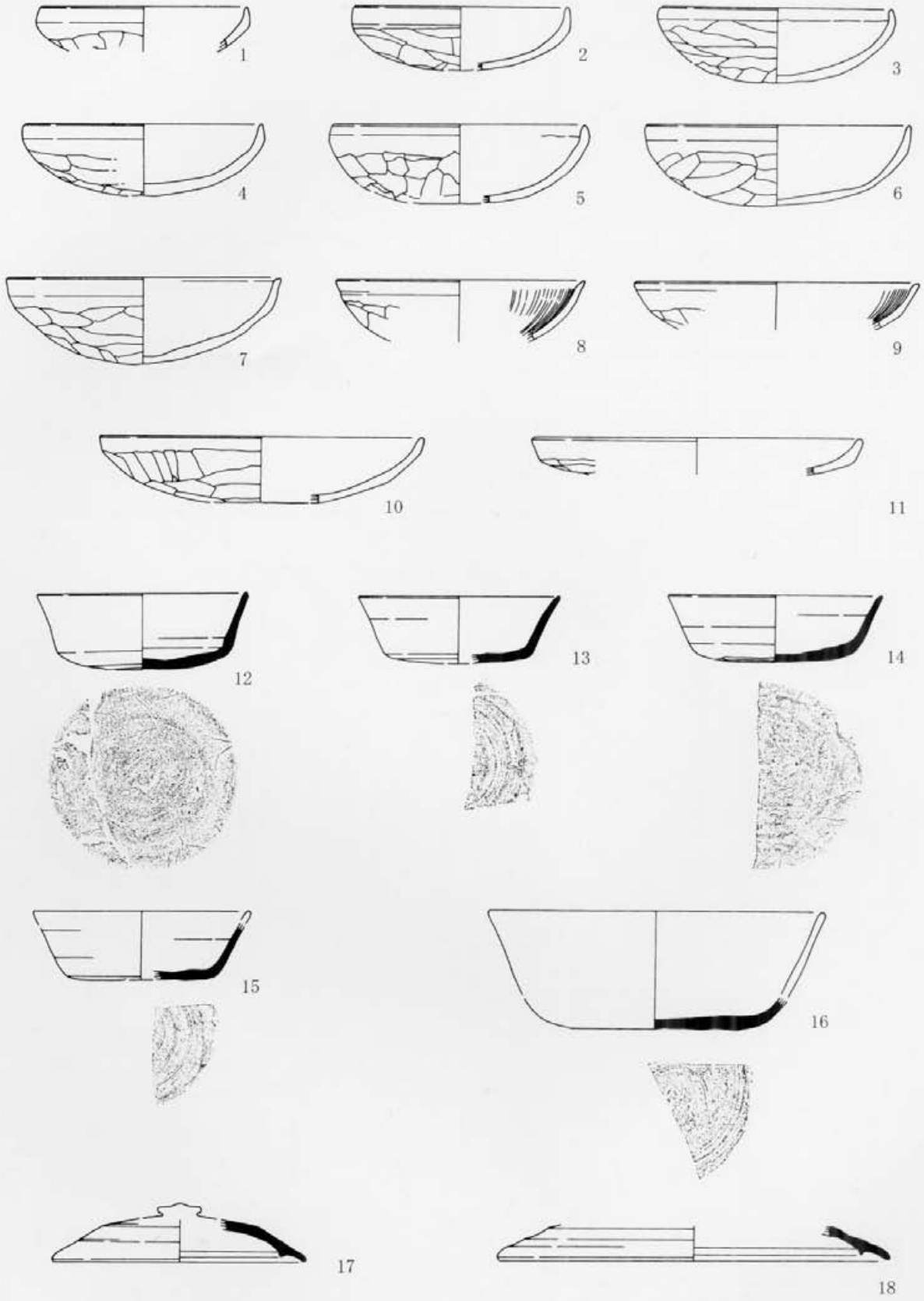
- | | | | |
|----|-------|-------------------------------------|--|
| 1 | 表土 | | |
| 2 | 暗茶褐色土 | ローム粒子、焼土粒子少量含む。炭化物微量含む。 | |
| 3 | 茶褐色土 | ローム粒子少量、焼土粒子微量含む。 | |
| 4 | 黄褐色土 | ロームブロック少量、ローム粒子微量含む。 | |
| 5 | 暗茶褐色土 | 焼土ブロック少量、焼土粒子少量含む。 | |
| 6 | 茶褐色土 | 焼土ブロック多量含む。しまり、粘性あり。 | |
| 7 | 明黄褐色土 | ロームブロック、粘土ブロック、焼土ブロック少量含む。しまり、粘性あり。 | |
| 8 | 茶褐色土 | ロームブロック主体。 | |
| 9 | 暗黄褐色土 | ロームブロック少量含む。 | |
| 10 | 黒褐色土 | ロームブロック、ローム粒子若干含む。 | |
| 11 | 暗茶褐色土 | ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子少量含む。しまり、粘性あり。 | |
| 12 | " | ローム粒子、焼土粒子少量含む。 | |
| 13 | 暗黄褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量、焼土粒子、炭化物粒子少量含む。 | |
| 14 | 暗茶褐色土 | ローム粒子多量含む。 | |
| 15 | 暗褐色土 | ローム粒子多量含む。 | |
| 16 | 暗茶褐色土 | ロームブロック、ローム粒子少量含む。 | |
| 17 | 暗褐色土 | ローム粒子少量、ロームブロック多量含む。 | |
| 18 | " | ローム粒子少量含む。 | |
| 19 | 茶褐色土 | ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。 | |
| 20 | 茶褐色土 | ローム粒子、ロームブロック、焼土粒子少量含む。 | |
| 21 | 暗褐色土 | ローム粒子、焼土粒子少量含む。 | |
| 22 | " | ローム粒子、ロームブロック少量含む。 | |
| 23 | 暗黄褐色土 | ロームブロック少量含む。しまりあり。 | |
| 24 | " | ローム粒子多量含む。 | |
| 25 | 暗褐色土 | ロームブロック、ローム粒子、焼土粒子多量含む。 | |
| 26 | " | ロームブロック、ローム粒子多量含む。 | |
| 27 | 暗黄褐色土 | ロームブロック主体。 | |
| 28 | 黒褐色土 | ローム粒子少量含む。しまり、粘性ややあり。 | |
| 29 | 暗黄褐色土 | ロームブロック少量含む。 | |
| 30 | 暗黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 | |
| 31 | 暗茶褐色土 | ローム粒子、焼土粒子少量含む。 | |
| 32 | 暗黄褐色土 | ローム粒子多量含む。 | |
| 33 | 暗茶褐色土 | ロームブロック少量含む。 | |



第6図 1号住居跡遺物分布状況

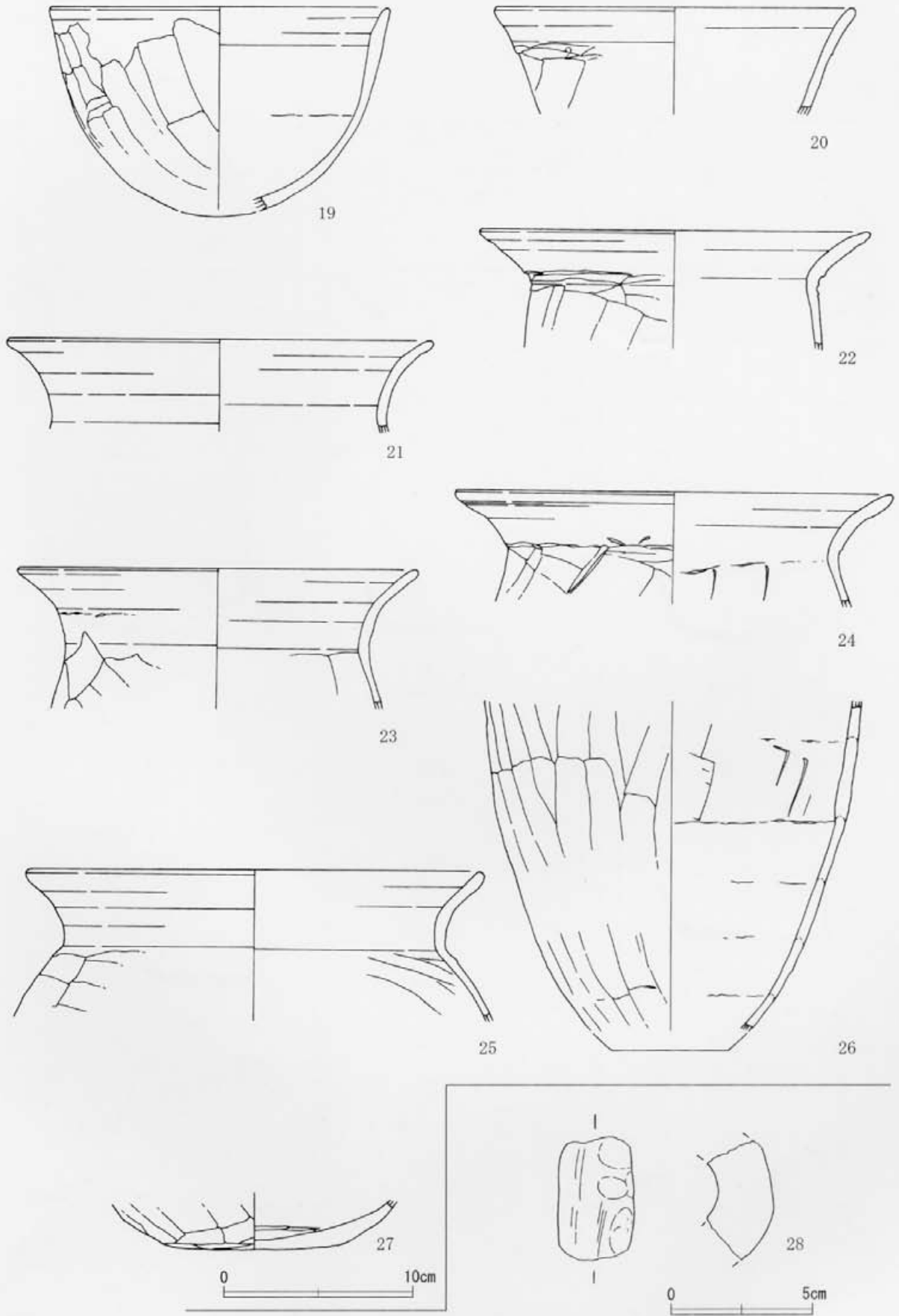
1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	杯	10.4	(2.3)	-	橙色	普通	石英、角閃石、雲母、チャート	図示70%	覆土、磨滅あり
2	杯	(10.8)	(3.2)	-	赤褐色	良好	雲母、角閃石、(精良)	図示45%	覆土
3	杯	(11.6)	3.8	-	にぶい橙褐色	普通	石英、角閃石、チャート	70%	覆土、内面に油脂状黒斑
4	杯	(11.9)	3.6	-	灰橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示25%	覆土
5	杯	12.6	(4.0)	-	灰赤褐色	普通	石英、角閃石、雲母、微砂粒	70%	覆土
6	杯	(13.2)	4.1	-	暗橙褐色	普通	石英、雲母、角閃石	70%	覆土、内面に油脂状黒斑
7	杯	13.7	4.4	-	橙色	普通	石英、角閃石、長石、微砂粒	70%	覆土
8	杯	(12.4)	(3.2)	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、赤色粒、微砂粒	図示15%	覆土、内面放射状暗文
9	杯	(14.2)	(2.4)	-	にぶい橙褐色	普通	石英、角閃石	図示10%	覆土、内面放射状暗文
10	皿	(16.2)	(3.3)	-	橙褐色	普通	石英、雲母、赤色粒	図示20%	覆土
11	皿	(16.4)	(1.9)	-	灰褐色	普通	石英、角閃石、雲母	図示10%	覆土
12	須恵杯	10.5	3.9	8.8	明灰色	不良	石英、長石、片岩	85%	図示、磨滅あり、末野
13	須恵杯	(10.6)	3.4	(7.4)	灰褐色	不良	石英、角閃石、微砂粒、赤色粒	図示25%	覆土、末野?
14	須恵杯	(10.6)	3.4	(7.8)	明灰色	良好	石英、長石、片岩	35%	覆土、手持ち強、末野
15	須恵杯	-	(2.9)	(7.5)	灰褐色	良好	石英、長石	図示20%	覆土、末野?
16	須恵壺	-	(1.7)	(8.4)	青灰色	良好	石英、長石、海綿骨針	図示20%	覆土、記号有り、南比企
17	須恵蓋	(12.7)	(2.2)	-	洗灰褐色	不良	石英、チャート、片岩、酸化鉄粒	図示15%	覆土、磨滅あり、末野
18	須恵鉢	(19.7)	(1.8)	-	灰色	普通	石英、長石	図示7%	覆土、末野
19	鉢	17.7	(11.1)	-	にぶい灰褐色	普通	石英、角閃石、長石、微砂粒	図示70%	図示
20	鉢	(18.8)	(5.7)	-	灰黒色	普通	石英、角閃石、チャート、パミス	図示12%	覆土、2位覆土と接合
21	甕	(22.2)	(5.0)	-	淡褐色	やや悪	石英、角閃石、砂粒多	図示15%	覆土
22	甕	(20.3)	(6.3)	-	にぶい灰赤色	良好	石英、雲母、角閃石、長石	図示15%	覆土
23	甕	(20.8)	(7.5)	-	灰褐色	普通	石英、角閃石、雲母、長石、砂粒	図示20%	図示
24	甕	(22.8)	(6.0)	-	にぶい橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母、微砂粒	図示35%	図示
25	甕	(23.7)	(7.9)	-	灰橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示15%	覆土
26	甕	-	(17.4)	-	橙褐～茶褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示55%	覆土
27	甕	-	(2.6)	9.6	橙褐色	普通	石英、角閃石、チャート、長石、砂粒	図示65%	図示
28	把手	-	-	-	黒褐色	普通	微砂粒	-	破片 覆土
29	編物石	長さ10.8	幅4.0	厚さ3.6	重さ251g	-	石質・花崗質砂岩	100%	図示
30	編物石	長さ13.3	幅5.5	厚さ4.3	重さ475g	-	石質・安山岩	100%	図示
31	編物石	長さ12.8	幅6.5	厚さ4.1	重さ480g	-	石質・安山岩	100%	図示
32	編物石	長さ11.0	幅5.2	厚さ3.4	重さ307g	-	石質・絹雲母片岩	100%	図示
33	編物石	長さ11.5	幅4.2	厚さ2.5	重さ189g	-	石質・絹雲母片岩	100%	図示
34	編物石	長さ14.7	幅6.3	厚さ2.9	重さ341g	-	石質・石黒片岩	100%	図示

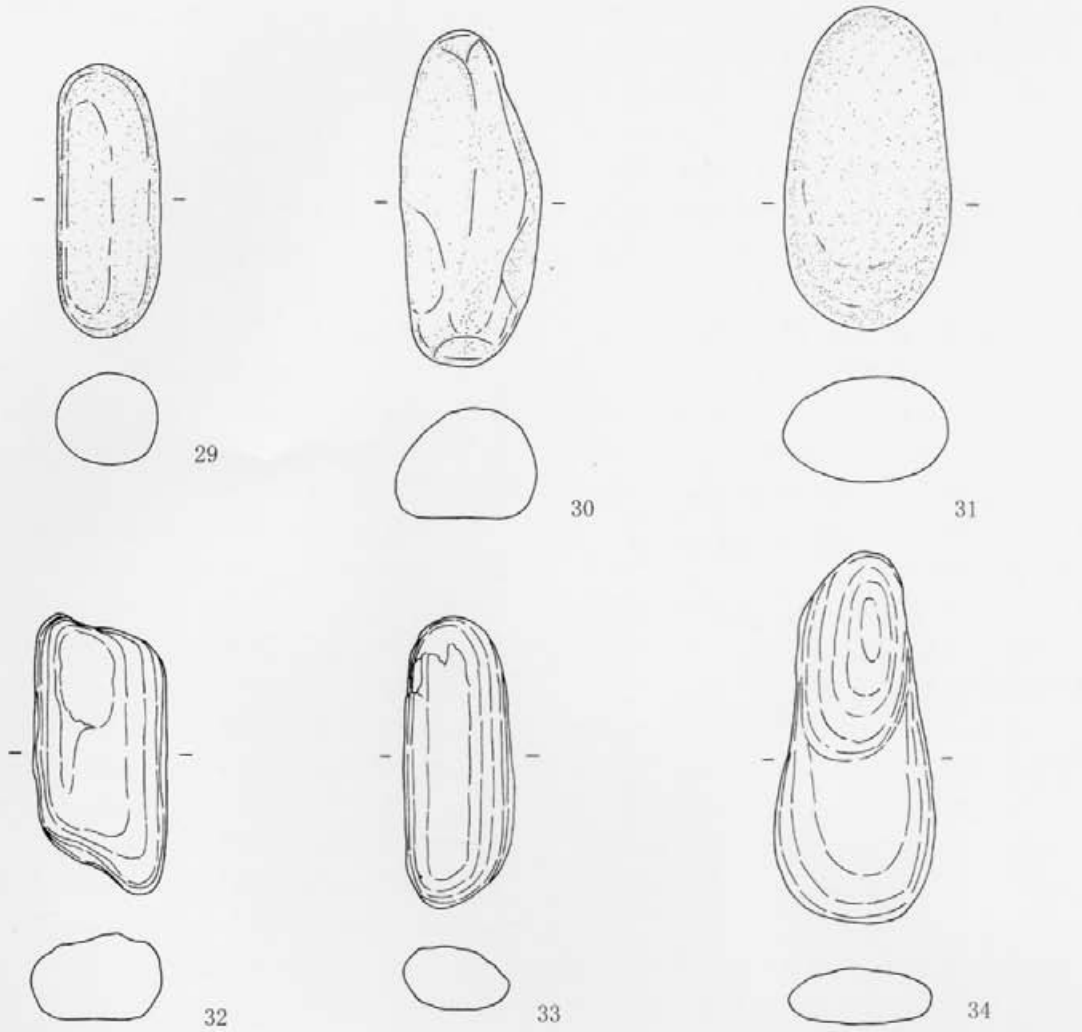


第7图 1号住居跡出土遺物(1)

0 10cm



第8图 1号住居跡出土遺物(2)



第9図 1号住居跡出土遺物(3)

0 10cm

2号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	坏	(11.0)	3.3	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、輝石、微砂粒	60%	覆土
2	坏	(11.8)	(3.6)	-	にふい橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示25%	覆土
3	坏	12.8	4.0	-	明橙褐色	普通	チャート、角閃石、微砂粒	80%	図示
4	坏	(13.2)	5.0	-	明橙色	普通	石英、角閃石、長石、微砂粒	30%	覆土
5	坏	(15.8)	5.7	-	明橙褐色	普通	石英、角閃石、パミス、微砂粒	40%	図示
6	坏	(14.6)	(3.7)	-	明褐色	普通	石英、角閃石、雲母、微砂粒	図示12%	覆土
7	坏	(16.8)	(5.3)	-	明黄褐色	普通	石英、角閃石、酸化鉄粒、微砂粒	図示25%	カマドA図示、内面放射状暗文、磨減あり
8	皿	(16.7)	(2.7)	-	黄褐色	普通	石英、角閃石	図示15%	覆土
9	須恵坏	(10.9)	(3.6)	(9.4)	明灰色	良好	石英、長石、片岩	図示25%	図示、未野
10	須恵坏	(16.7)	(3.8)	-	淡灰～灰褐色	不良	石英、長石、黒色粒、砂粒	図示15%	覆土
11	須恵坏	(17.8)	4.8	(15.2)	明灰～灰褐色	不良	石英、長石、片岩、黒色粒、赤色粒、砂粒	45%	図示、回転鋸切り後軽い手持ち廻ケズリ、未野、磨減
12	須恵坏	(15.8)	4.1	(11.8)	暗灰色	普通	石英、長石、片岩	40%	図示、回転鋸切り未調整、内底部に平行明き痕、未野
13	須恵蓋?	-	(2.4)	(6.4)	暗灰色	良好	長石、黒色粒	図示20%	覆土、未野
14	須恵蓋	(17.0)	(1.5)	-	灰赤褐色	不良	石英、チャート、砂粒	図示15%	覆土、未野
15	須恵蓋	口径2.4	鈕高0.8	-	灰赤褐色	普通	微砂粒		破片 覆土、酸化塩

長軸90cm、短軸84cmであり、平面形は不整形を呈する。床面からの深さは51cmである。周溝は、壁際を一周しており、床面から5～10cm程掘り込まれている。北東コーナー付近には、長軸114cm、短軸84cmほどの長方形の掘り込みが確認された。この他、周溝付近に小ピットが複数箇所検出されている。このうちP6は、覆土上層から掘り込まれていた。

遺物は、土師器、須恵器、磨石、編み物石等が出土している。床面壁際にやや浮いた状態で、これらの遺物が検出されていることが特徴的である（第6図）。これらは、住居跡壁際の立ち上がり周囲が、棚的な施設として利用されていたことを示唆するものであろうか。

【2号竪穴住居跡】

A区西端に位置する。実際には、5軒の重複よりなっており、年代順に2A、2B、2C、2D、2E号住居跡と呼称する。

2A号住居跡は、南東コーナー付近のみが検出されている。現存する壁は、東壁で174cm、南壁で60cmである。遺物等は出土していない。覆土上層付近からピット状の攪乱が2箇所検出されており床面まで達している。確認面から床面までの深さは15cmである。

2B号竪穴住居跡は、北西コーナー付近のみが検出されている。現存する壁は、北壁で78cm、西壁で48cm程である。確認面から床面までの深さは、36cm程である。

2C号竪穴住居跡は、住居跡の西及び南壁が調査区域外に延びており、2B、2D、2E号住居跡に切られている。カマドは検出されていない。住居跡の規模は、南及び東壁より判断すると長軸4.68m（現存長）、短軸4.08mである。平面形は、隅丸長方形を呈すると考えられる。確認面から床面までの深さは約40cmである。主軸方位は、N-45°-Wである。重複する5軒の住居跡の中では最大規模を有する。

2D号住居跡は、東半を2E号住居跡に壊され

ており、南西コーナー付近は、調査区域外に延びている。カマドは、西壁に存在しているが、半分は調査区域外となっている。住居跡の全体像は不明であるが、北壁で2.28m、西壁で1.74m程が残存している。主軸方位はN-50°-Wであり、2C号住居跡に近似している。周溝は、北東コーナー付近で壁立ち上がりから5～15cm程離れて検出されているが、全周はしていない。ピットは1箇所検出されている。

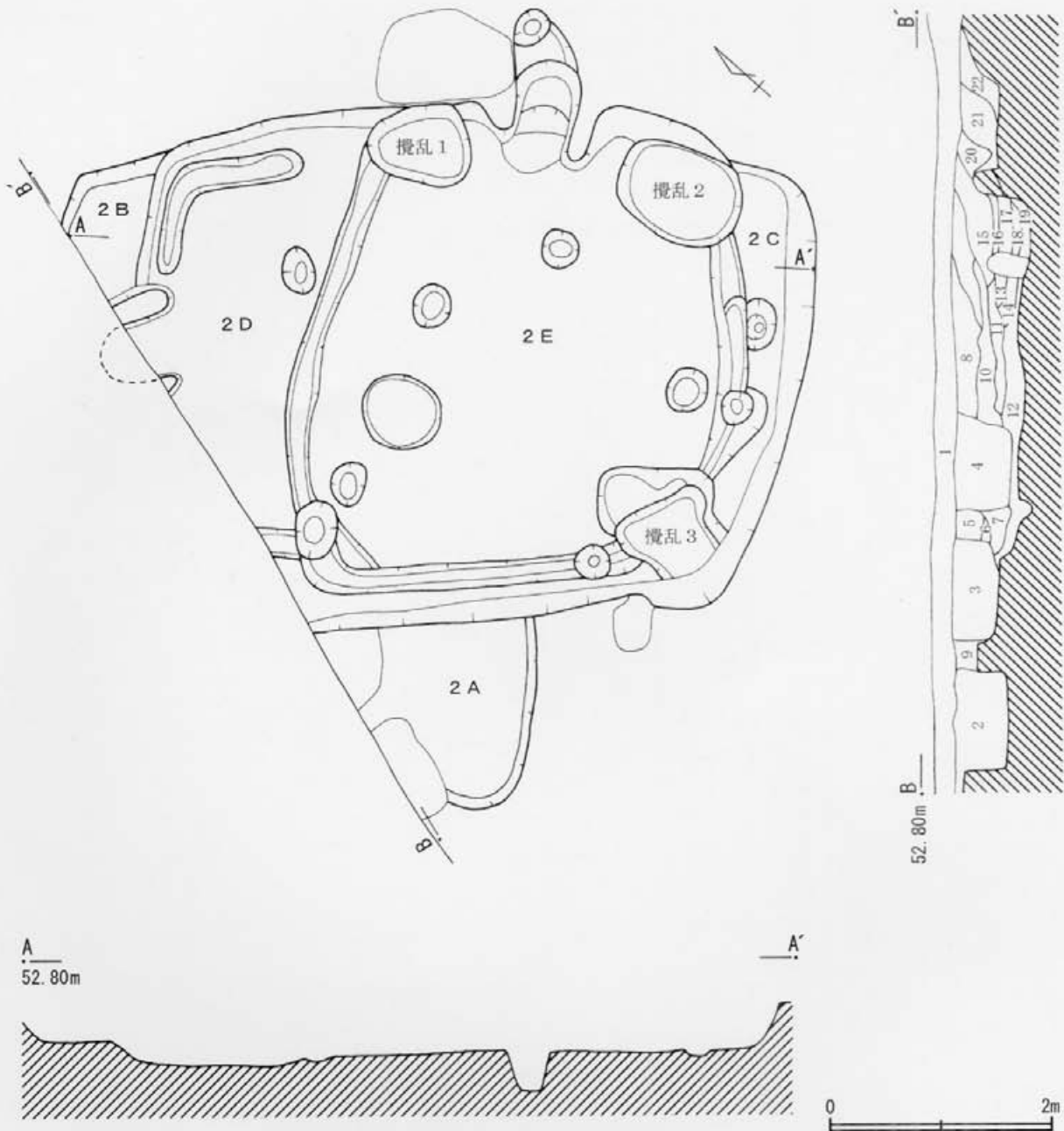
カマドは、大部分が調査区域外に延びており全容は不明である。袖部は、粘土が用いられている。焚口部幅は57cmである。燃焼部は、45cm程が残存している。

2E号住居跡は、重複する5軒の住居跡では最新のものであり、全容が判明した。住居跡の規模は長軸4.38m、短軸4.32mであり、平面形はやや歪んだ台形である。主軸方位はN-51°-Eである。確認面から床面までの深さは40cm程である。住居跡には、3箇所に攪乱が認められた（攪乱1～3）。周溝は北壁を除き全周し床面から5cm程掘り込まれている。柱穴は明確ではないが、床面に4箇所、周溝内に3箇所のピットが存在している。この他に住居南西付近に長軸78cm、短軸82cm、床面に浅い掘り込みが検出されている。

カマドは、北壁を90cm掘り込み構築されている。袖部は、粘土が用いられている。焚口部は幅45cmであり、前庭部付近からやや浅い掘り込みがある。

燃焼部は、長さ96cmが検出されている。前庭部付近の掘り込みから煙道部までの長さは141cm程である。

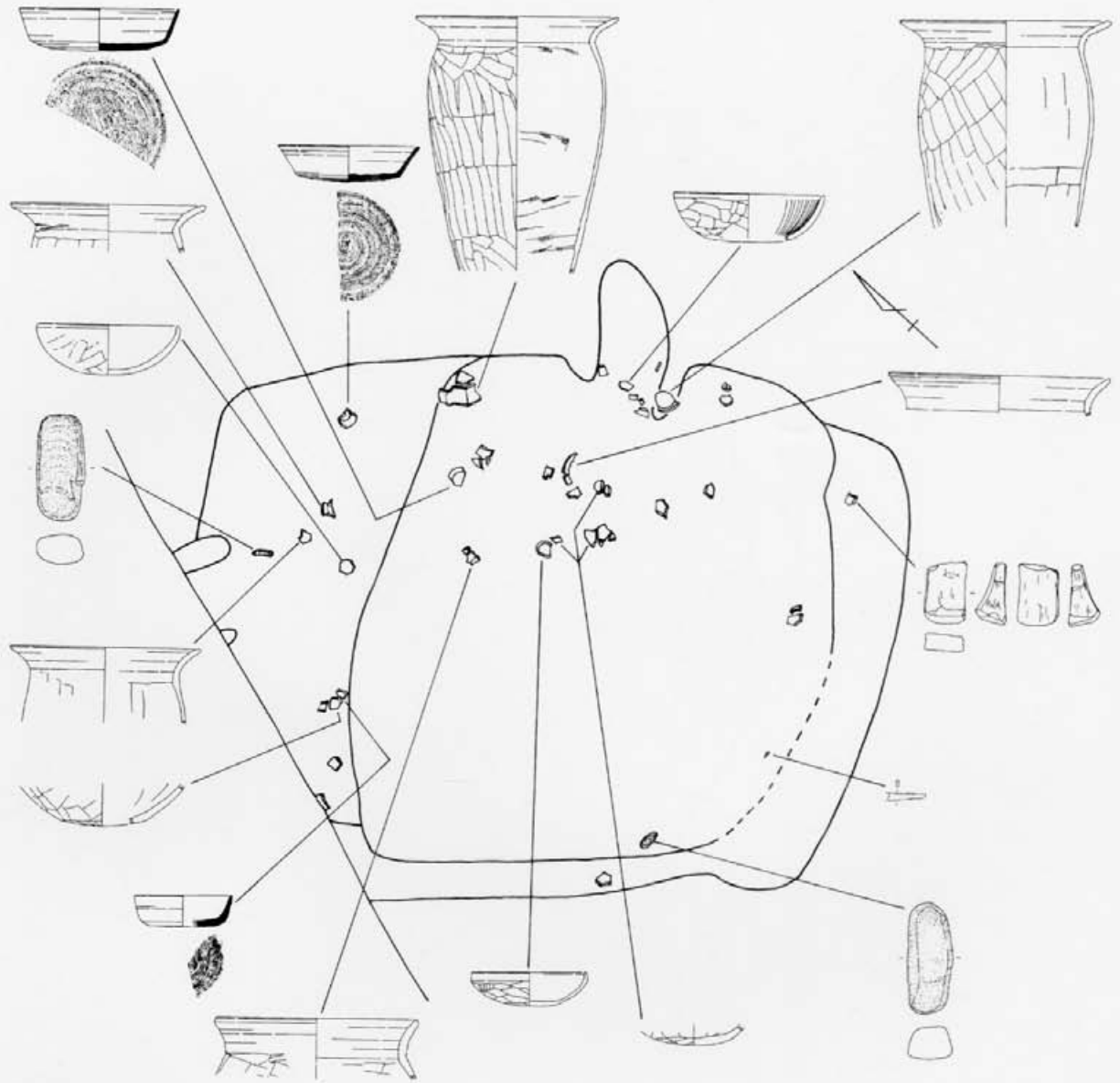
遺物は、2D、2E号住居跡を中心に出土した。土師器・須恵器のほか土製支脚、編み物石、砥石等がある。2D、2E号住居跡の遺物を見る限り、遺物の年代幅は認められず、短期間での重複と見るべきであろう。



第10図 2号住居跡実測図

2号住居跡土層説明

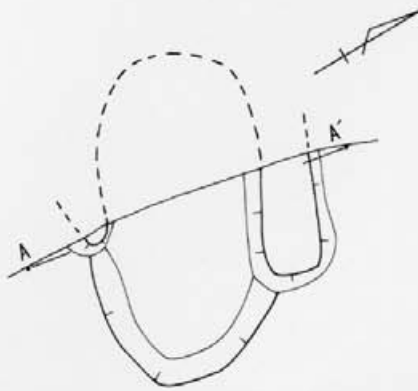
1	表土		12	暗黄褐色土	ローム粒子、ロームブロック多量、焼土粒子微量含む。しまり、粘性なし。
2	茶褐色土	ローム粒子、ロームブロックを多量に含む。しまり、粘性なし。	13	灰褐色土	白色粘土主体。焼土粒子微量含む。
3	暗茶褐色土	ローム粒子多量含む。炭化物粒子微量含む。しまり、粘性なし。	14	黒褐色土	粘土ブロック少量、焼土粒子微量含む。しまり、粘性あり。
4	暗茶褐色土	ローム粒子少量、焼土粒子微量含む。しまり、粘性なし。	15	明灰褐色土	ローム粒子多量、焼土粒子、炭化物粒子微量、粘土ブロック少量含む。しまりあり、やや粘性あり。
5	暗褐色土	ローム粒子、焼土粒子微量、パミス少量含む。しまりあり。粘性なし。	16	灰褐色土	ローム粒子、炭化物粒子微量含む。しまり、粘性あり。
6	暗黄褐色土	ロームブロック多量含む。しまり、粘性なし。	17	暗茶褐色土	ロームブロック少量、炭化物粒子微量、焼土粒子少量含む。しまり、粘性あり。
7	暗茶褐色土	ローム粒子少量含む。しまり、粘性なし。	18	赤褐色土	ローム粒子少量、粘土ブロック多量、焼土粒子多量含む。しまり、粘性あり。
8	"	ローム粒子多量、パミス少量、焼土粒子少量、炭化物粒子微量含む。しまり、粘性なし。	19	黒褐色土	粘土ブロック、焼土粒子、炭化物粒子多量含む。しまり、粘性あり。
9	"	ローム粒子多量、パミス少量、焼土粒子微量含む。	20	暗茶褐色土	ローム粒子微量、焼土粒子少量、パミス微量含む。炭化物粒子多量含む。しまり、粘性なし。
10	暗茶褐色土	ローム粒子多量、焼土粒子、炭化物粒子微量含む。しまり、粘性なし。	21	暗褐色土	ローム粒子、パミス微量含む。しまり、粘性なし。
11	黒褐色土	ローム粒子少量、焼土粒子微量含む。しまり、粘性なし。	22	暗茶褐色土	ローム粒子微量含む。しまり、粘性なし。



第11図 2号住居跡遺物分布状況

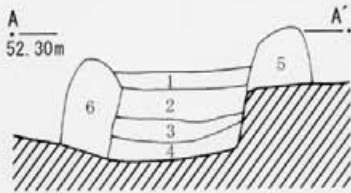
2号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
16	須恵蓋	(19.8)	《2.0》	-	暗灰色	普通	石英、長石、片岩	図示10%	覆土
17	須恵蓋	(12.2)	《1.7》	-	暗灰色	良好	石英、長石、片岩	図示20%	覆土
18	甕	23.3	23.5	-	灰橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母、パミス、微砂粒	図示60%	E号住カマド図示
19	甕	-	《10.0》	4.5	暗赤～黒褐色	普通	石英、角閃石、パミス、長石	図示70%	覆土
20	甕	(21.6)	(5.5)	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、パミス	図示25%	図示
21	甕	(21.3)	(8.6)	-	にぶい橙褐色	普通	石英、長石、角閃石、パミス、微砂粒	図示10%	図示
22	甕	(21.5)	(6.0)	-	にぶい橙褐色	普通	石英、角閃石、パミス、長石、微砂粒	図示15%	D号住カマド
23	甕	(22.6)	《29.0》	-	暗褐色	普通	石英、角閃石、パミス、微砂粒	図示38%	図示
24	甕	(22.5)	《12.9》	-	暗赤褐色	普通	石英、パミス、角閃石、チャート、微砂粒	図示30%	覆土
25	甕	-	《4.5》	-	灰黒～橙褐色	普通	石英、角閃石、パミス、微砂粒	図示60%	図示
26	甕	(22.9)	《19.0》	-	明橙褐色	普通	石英、角閃石、長石、微砂粒、パミス	図示40%	覆土
27	甕	(22.5)	(3.8)	-	灰橙褐色	普通	石英、角閃石、パミス、酸化鉄粒、砂粒	図示10%	図示
28	甕	(24.7)	(4.4)	-	灰褐色	普通	石英、角閃石、雲母	図示35%	図示
29	甕	-	(2.3)	(3.2)	にぶい橙褐色	良好	石英、角閃石、長石	図示50%	図示
30	甕	-	(2.4)	-	灰黒～橙褐色	普通	石英、角閃石、チャート、雲母	図示75%	図示
31	甕	-	(3.6)	-	にぶい灰褐色	普通	石英、角閃石、パミス	図示40%	覆土
32	土製支脚	直径(9.5)	(9.1)	-	暗灰赤褐色	普通	石英、角閃石、チャート、パミス、砂粒	図示35%	覆土
33	須恵甕	-	-	-	灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	覆土、末野

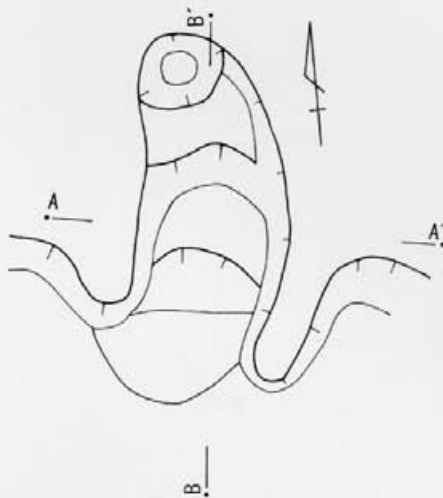


2 D号住居跡カマド土層説明

- 1 灰褐色土 灰褐色粘土主体。焼土粒子微量含む。しまり、粘性あり。
- 2 暗茶褐色土 ロームブロック少量、焼土粒子少量、炭化物粒子微量含む。しまりあり。粘性ややあり。
- 3 赤褐色土 焼土粒子、粘土ブロック多量、ローム粒子少量含む。しまりあり。粘性ややあり。
- 4 黒褐色土 粘土ブロック、焼土粒子、炭化物粒子多量含む。しまり、粘性ともややあり。
- 5 灰褐色土 灰褐色粘土主体。
- 6 " " " "

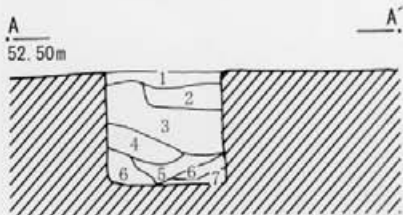
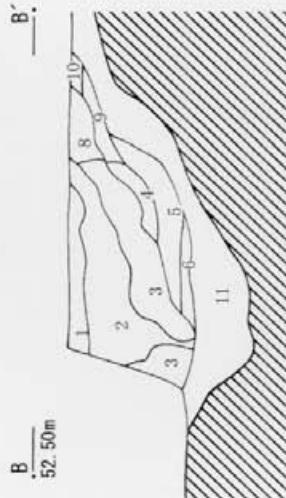


第12図 2 D号住居跡カマド実測図

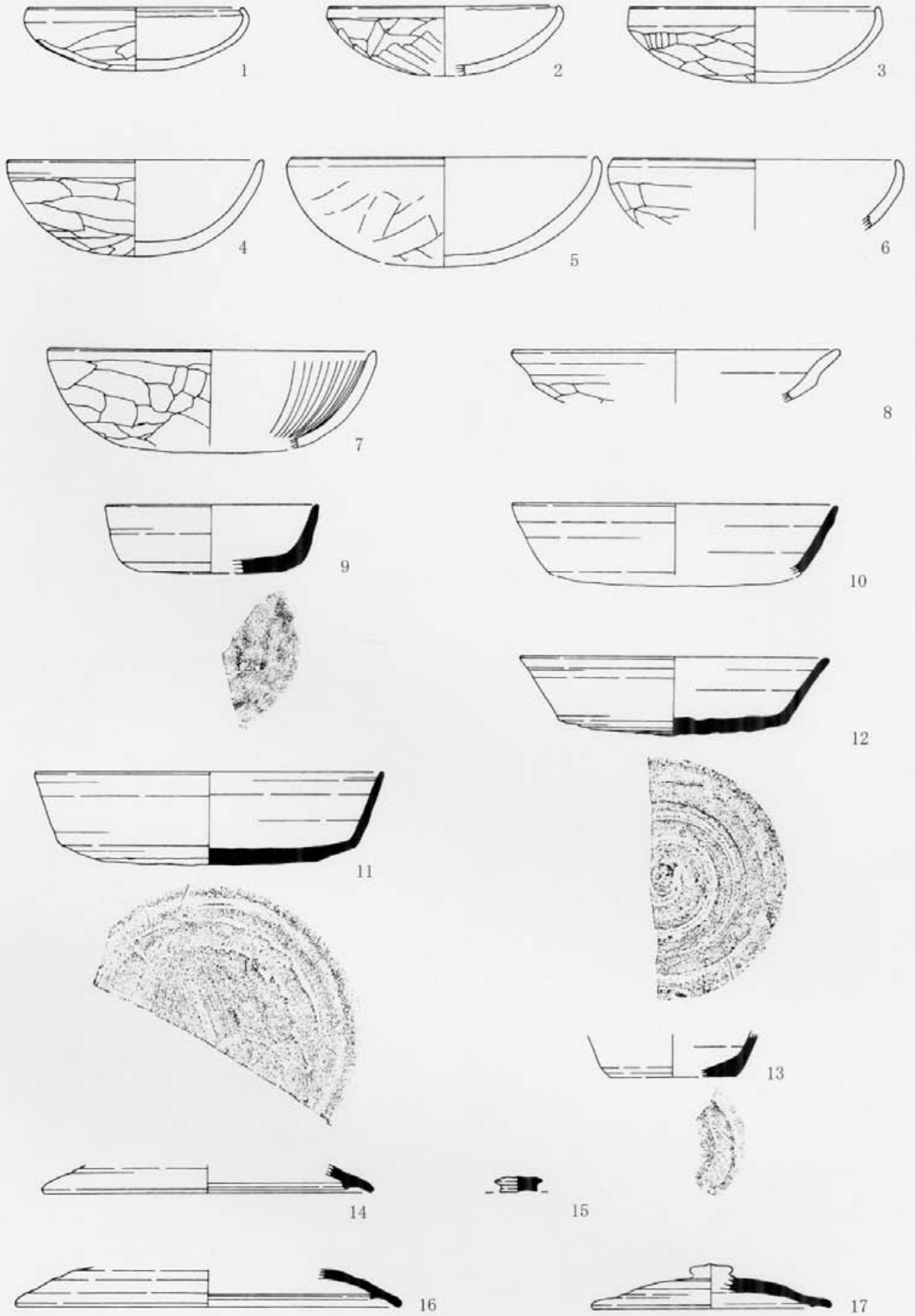


2 E号住居跡カマド土層説明

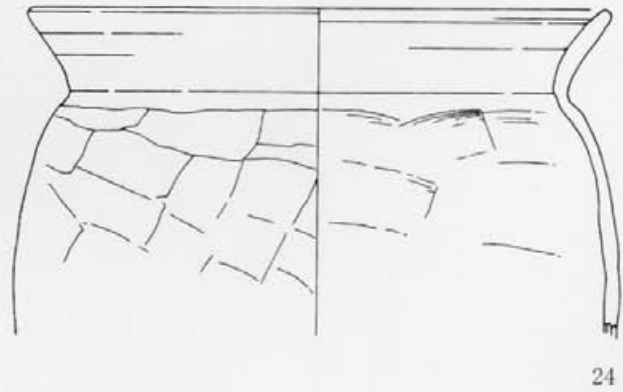
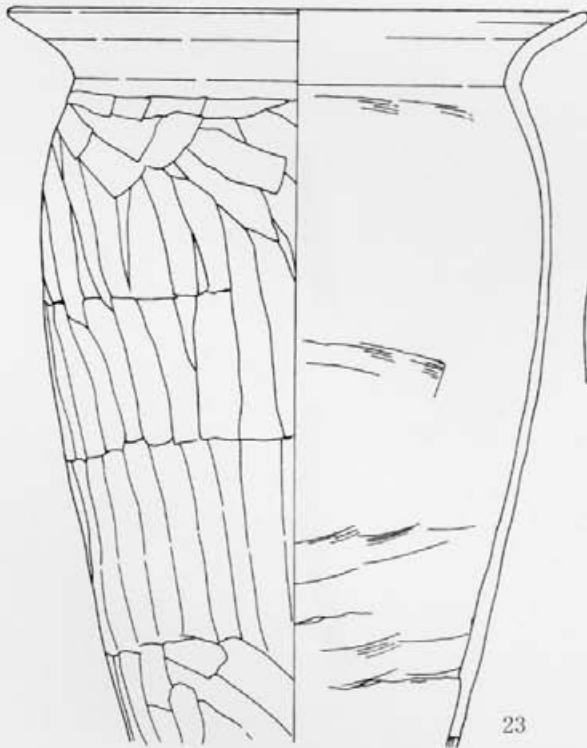
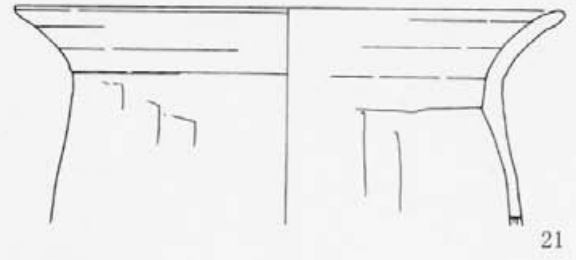
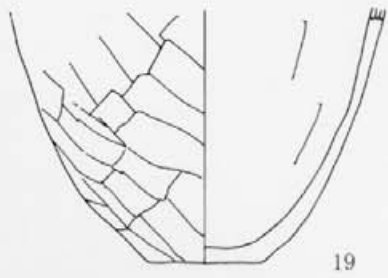
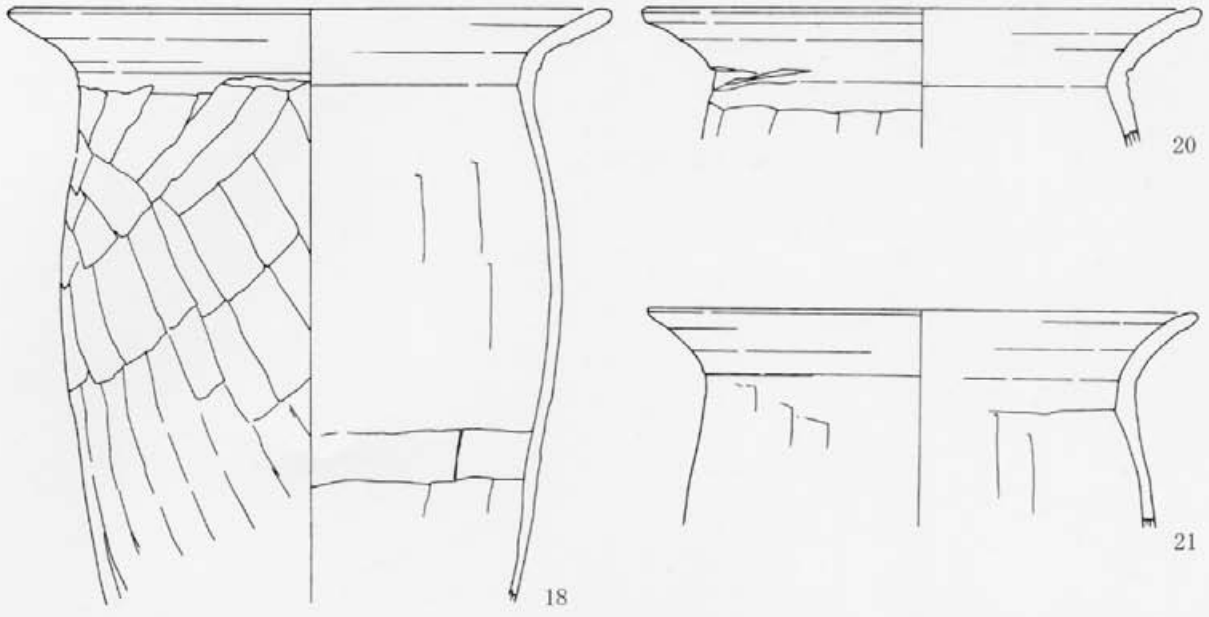
- 1 暗茶褐色土 ローム粒子少量、焼土粒子微量含む。しまり、粘性ややあり。
- 2 暗茶褐色土 ローム粒子多量、炭化物粒子、焼土粒子微量含む。しまり、粘性あり。
- 3 灰褐色土 ローム粒子少量、焼土粒子微量含む。しまり、粘性あり。
- 4 明灰褐色土 ローム粒子微量、焼土粒子多量含む。
- 5 赤褐色土 焼土粒子、炭化物粒子多量含む。
- 6 黒褐色土 炭化物粒子、焼土粒子多量、ローム粒子微量含む。
- 7 黄褐色土 ローム粒子多量含む。
- 8 灰褐色土 ローム粒子、炭化物粒子少量、焼土粒子多量含む。しまり、粘性あり。
- 9 灰褐色土 ローム粒子微量、焼土粒子、炭化物粒子多量含む。
- 10 明茶褐色土 ローム粒子、焼土粒子少量含む。
- 11 暗褐色土 ロームブロック少量、焼土ブロック、粘土ブロック多量含む。しまり、粘性あり。



第13図 2 E号住居跡カマド実測図

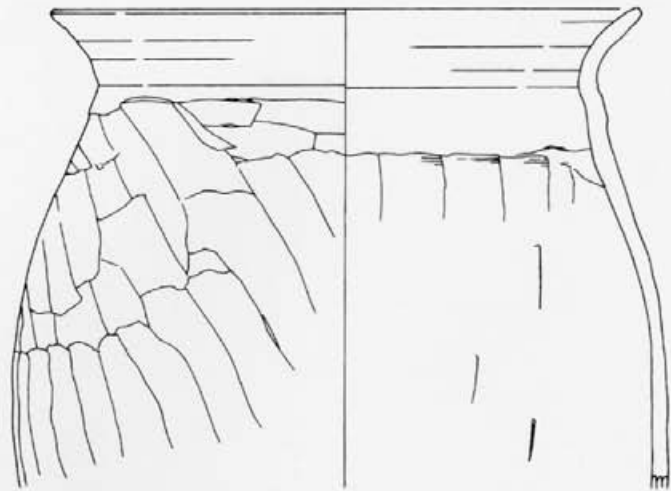


第14图 2号住居跡出土遺物(1)



第15图 2号住居跡出土遺物(2)

0 10cm



26



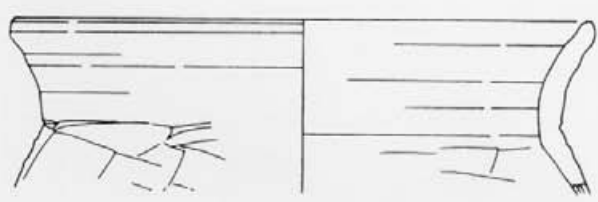
29



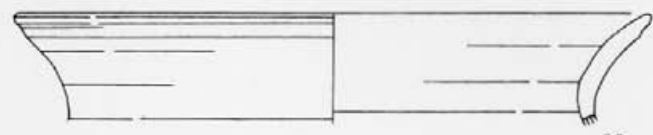
30



31



27



28



32



33



34



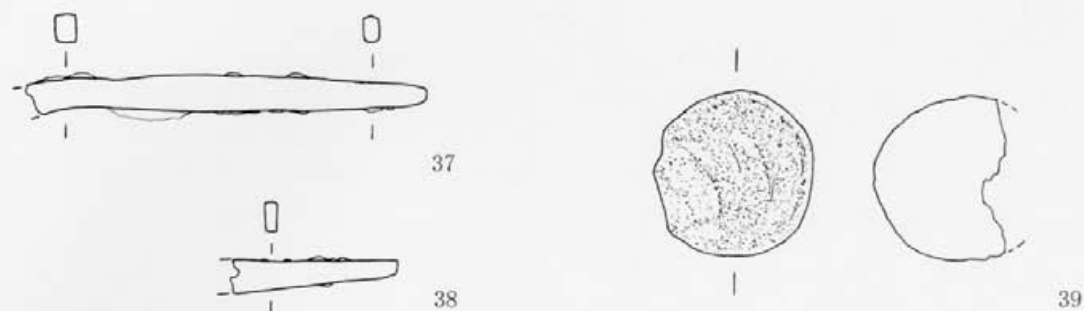
35



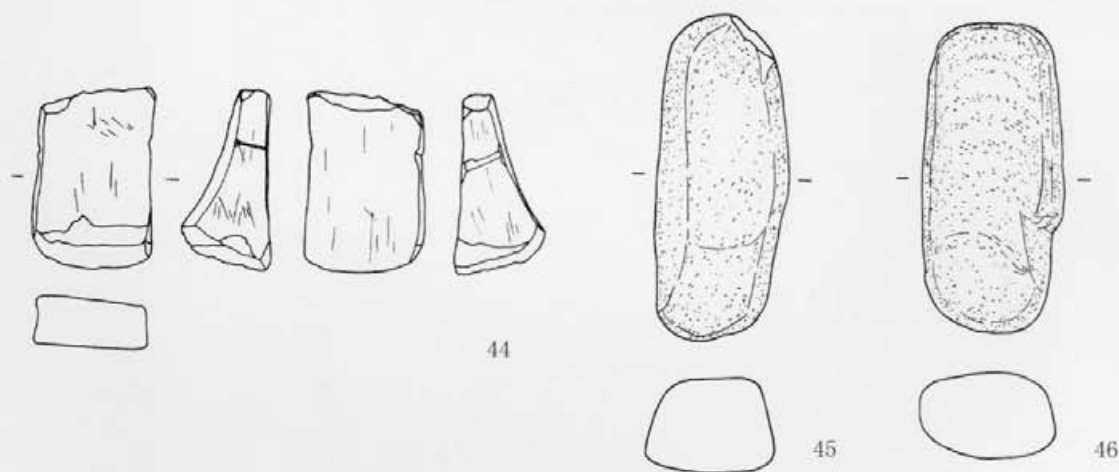
36

第16图 2号住居跡出土遺物(3)





0 5cm



0 10cm

第17図 2号住居跡出土遺物(4)

2号住居跡出土遺物観察表(3)

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
34	須恵甕	-	-	-	淡灰色	良好	石英、長石、細礫	破片	覆土、外面平行叩き、内面青海波、末野
35	須恵甕	-	-	-	暗灰色	やや悪	石英、長石、赤色粒	破片	覆土、外面平行叩き後ナデ、内面ナデ、末野
36	須恵甕	-	-	-	明灰色	良好	石英、長石、片岩	破片	覆土、外面平行叩き、内面青海波、末野
37	棒状鉄製品	長さ10.3	幅0.9	厚さ0.6	重さ18.2g	-	-	破片	覆土、細い角棒状、釘か
38	刀子	長さ4.3	幅0.9	厚さ0.3	重さ2.4g	-	-	破片	覆土、基部
39	磨瓶石	直径(4.2)	重さ33.5g	-	-	-	石質・角閃安山岩	70%	覆土、球形で磨痕あり
40	石製品	長さ3.4	幅2.4	重さ19.5g	-	-	石質・滑石	60%	覆土、表面研磨し、くびれを削る。端部に円錐状の掘り込みあり、用途不明
41	鉄滓	長さ4.4	幅1.4	厚さ2.0	重さ33.1g	磁着度・弱	-	破片	覆土
42	鉄塊	長さ3.6	幅3.0	厚さ2.4	重さ36.4g	磁着度・強	-	破片	覆土、鉄鉄か
43	鉄塊	長さ2.9	幅2.3	厚さ1.5	重さ16.0g	磁着度・強	-	破片	覆土、鉄鉄か
44	砥石	長さ7.0	幅4.7	厚さ3.5	重さ108.8g	-	石質・凝灰岩	80%	図示
45	礪物石	長さ12.8	幅5.1	厚さ3.7	重さ403.0g	-	石質・ホルンフェルス	100%	図示
46	礪物石	長さ12.1	幅5.4	厚さ3.4	重さ333.0g	-	石質・結晶片岩	100%	図示

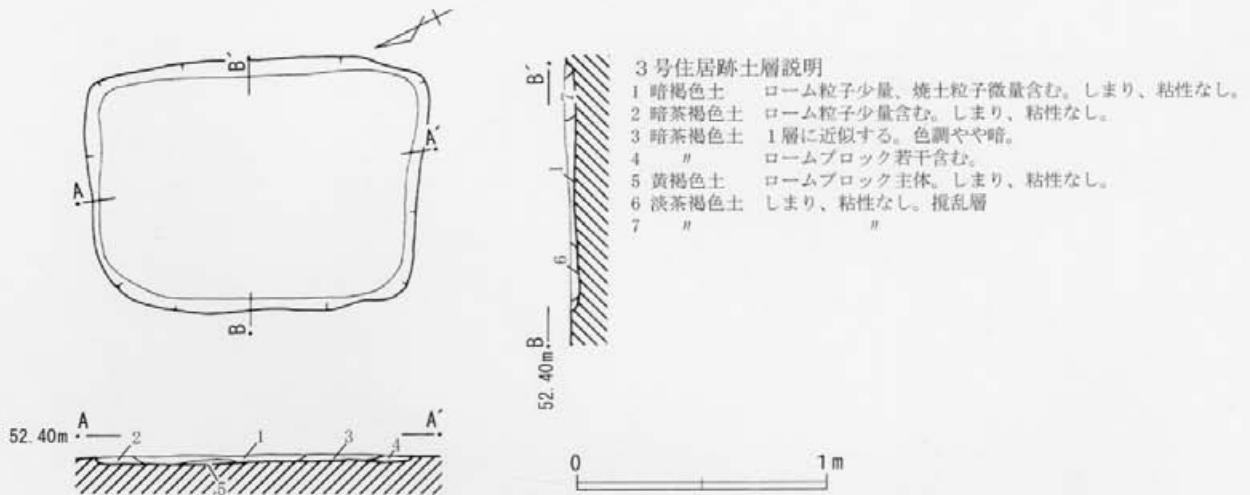
【3号住居跡】

B区中央部に位置する。住居跡の規模は長軸2.82m、短軸1.98mを測る。カマドは検出されなかった。

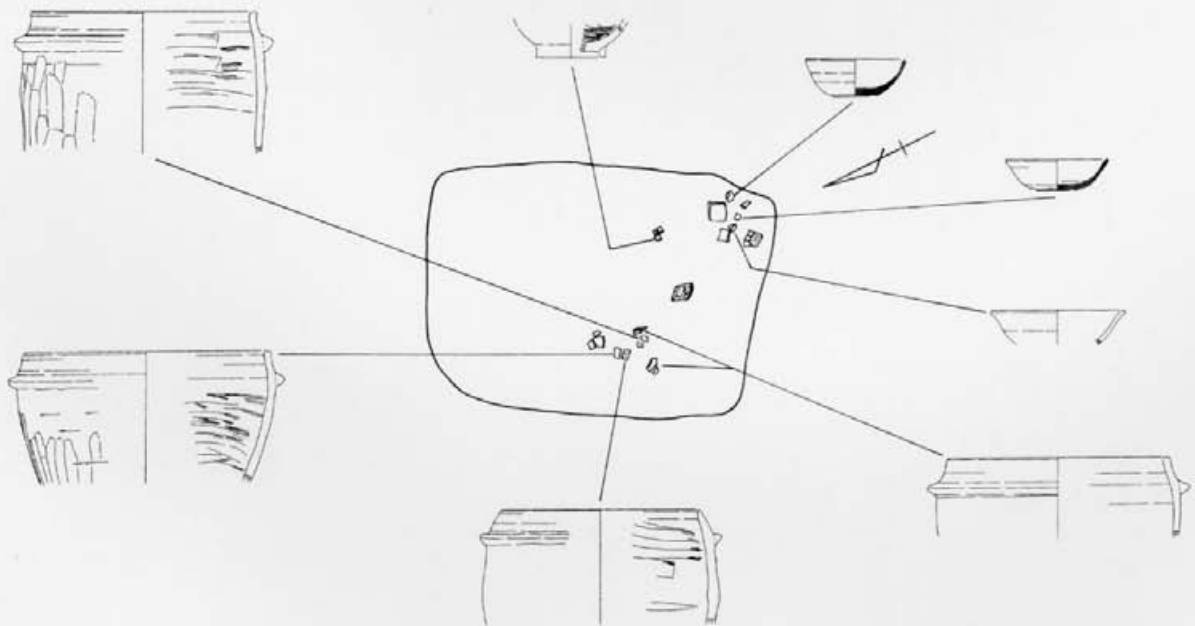
平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-25°-Eである。確認面から床面までの掘り込みは

6cm程を測る。

遺物は床面直上からロクロ土師器、須恵器、羽釜が出土している。住居跡南東コーナー部及び住居跡西壁より遺物の集中が認められた。



第18図 3号住居跡実測図



第19図 3号住居跡遺物分布状況

【4号住居跡】

B区西端に位置する。住居跡の大部分が調査区域外となっているため、遺構の全体像は不明であるが、カマド及び住居跡北東部が検出されている。

A区5号住居跡との位置関係により、両者は重複関係にあると考えられるが新旧関係は不明である。

住居跡は、北壁で2.40m（カマド部分含む）、東壁で1.08mが検出された。住居跡の主軸方位はN-40°-Wである。住居跡上層より攪乱が4箇所検出されており、遺構の残存状況は悪い。

確認面から床面までの深さは10cm程である。周溝は、カマド付近を除き全周している。周溝の深さは約12cmである。ピットは住居跡東半部において2箇所検出されている。床面から底面までの深さは近似している。カマドは壁を削り出し構築されている。カマドの半分は調査区域外となっており全体像は不明であるが、焚口部幅60cm、燃焼部現存長33cmを測る。

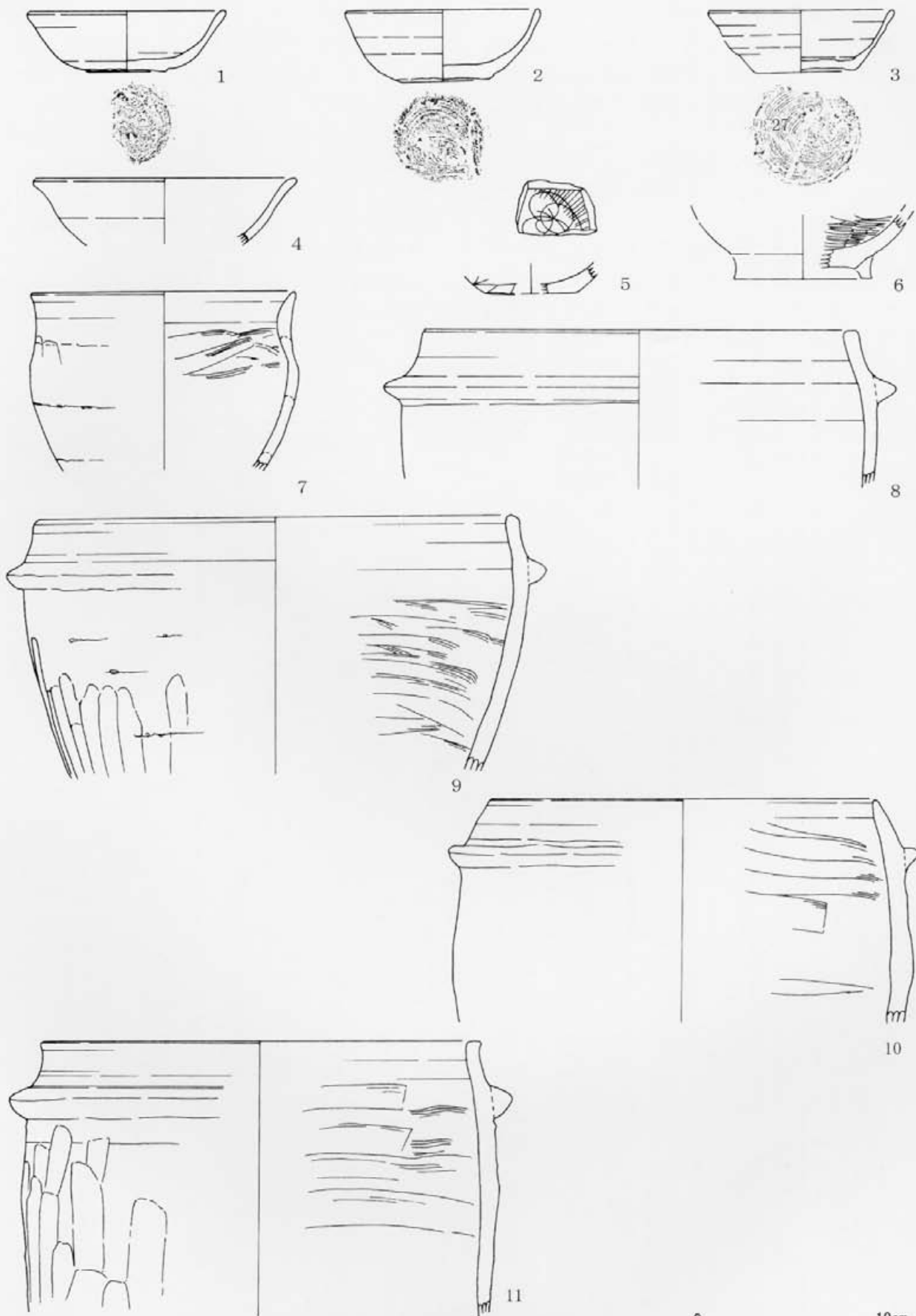
住居跡床面直上からは、土師器・須恵器が多量に出土している。

3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	杯	(10.3)	3.3	(4.2)	灰赤褐色	やや悪	石英、チャート、角閃石、長石、片岩、(粗い)	25%	図示、ロクロ土師器、回転糸切り未調整
2	杯	10.2	3.9	4.8	橙褐色	普通	石英、チャート、角閃石、微砂粒	70%	図示、ロクロ土師器、回転糸切り未調整
3	杯	(9.7)	3.4	5.3	黄褐～灰黒色	普通	石英、角閃石、(精良)	80%	覆土、ロクロ土師器、回転糸切り未調整
4	高台壇	(13.7)	《3.6》	-	灰橙褐色	普通	石英、雲母、微砂粒	図示15%	図示、ロクロ土師器
5	杯	-	《1.7》	(4.8)	赤褐色	良好	石英、雲母、微砂粒	図示20%	覆土、内面放射状+螺旋暗文、在地産
6	高台壇	-	《2.9》	-	暗褐色	普通	石英、長石	図示20%	図示、内面黒色処理、捲ミガキ
7	小形甕	(13.9)	《5.6》	-	灰赤褐色	普通	石英、長石、微砂粒	図示30%	覆土
8	羽釜	(22.8)	《8.6》	-	淡灰赤褐色	やや悪	石英、チャート、酸化鉄粒、砂粒	図示10%	図示、土師質土器、非ロクロ
9	羽釜	(25.0)	《13.8》	-	にぶい灰褐色	普通	石英、チャート、角閃石、微砂粒	図示20%	図示、土師質土器、非ロクロ
10	羽釜	(20.3)	《12.0》	-	にぶい橙褐色	普通	石英、チャート、角閃石、片岩、細礫	図示15%	図示、土師質土器、非ロクロ
11	羽釜	(23.3)	《14.8》	-	暗赤褐色	普通	石英、長石、微砂粒、片岩	図示20%	図示、土師質土器、非ロクロ

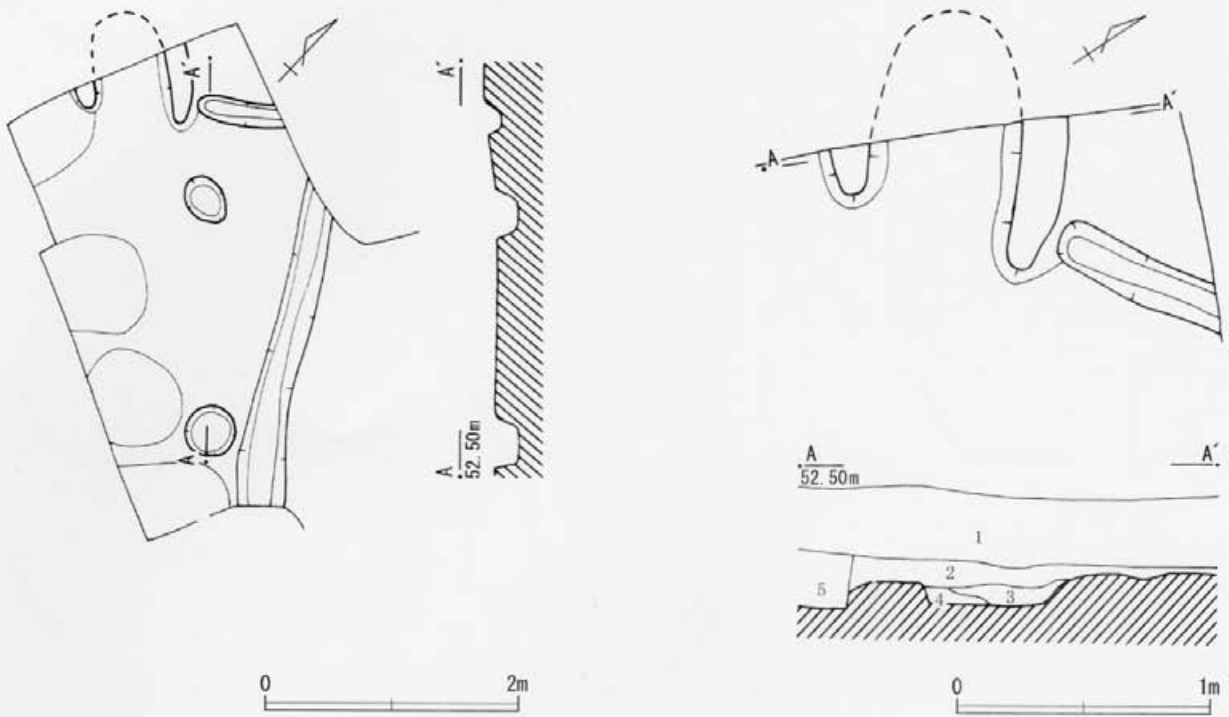
4号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	杯	11.8	3.3	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	75%	図示
2	杯	(14.2)	(2.5)	(11.0)	灰橙褐色	普通	石英、雲母、酸化鉄粒、(精良)	図示15%	覆土、内面放射状暗文、磨減
3	杯	(14.9)	(3.2)	(11.6)	橙色	普通	石英、角閃石、雲母、酸化鉄粒	図示25%	図示、内面放射状暗文、磨減
4	杯	(16.0)	(4.3)	-	明橙褐色	普通	石英、角閃石、パミス	図示15%	覆土
5	杯	(15.8)	(3.9)	(10.6)	橙褐色	良好	石英、角閃石、チャート、微砂粒	図示55%	図示、内面放射状暗文
6	杯	-	-	-	橙褐色	良好	微砂粒、白色粒、(精良)	破片	覆土、内面螺旋暗文、在地産
7	須恵杯	11.7	3.6	8.5	緑灰色	良好	石英、長石、海綿骨針	90%	図示、底部に誰記号(-)あり、南比企
8	須恵杯	12.4	3.6	8.6	淡灰色	良好・聖殿	長石、黒色粒	99%	図示、底部周辺擦ケズリ、群馬産
9	須恵杯	(12.4)	(3.5)	(9.0)	明灰色	良好	石英、長石、海綿骨針	図示25%	覆土、南比企
10	須恵杯	(13.0)	《3.2》	-	明灰色	普通	石英、長石、海綿骨針	図示10%	覆土、南比企
11	須恵杯	(12.4)	3.2	(7.5)	明灰色	良好	石英、長石、片岩、黒色粒	40%	図示、底部回転糸切り未調整、末野
12	須恵高台付杯	(12.5)	4.0	(7.3)	暗灰～明灰色	良好	石英、長石、海綿骨針	45%	図示、南比企
13	須恵高台壇	15.4	6.4	8.5	淡灰色	やや悪	石英、長石、黒色粒、微砂粒	85%	図示、末野
14	須恵高台壇	(15.8)	《5.3》	-	灰色	良好	石英、長石、海綿骨針	図示25%	図示、南比企
15	須恵蓋	15.3	3.5	-	黄灰色	普通	石英、長石、片岩、微砂粒	85%	図示、末野
16	須恵蓋	18.3	4.1	-	橙褐～灰褐色	やや悪	石英、長石、黒色粒	80%	図示、末野?
17	甕	(22.0)	《19.8》	-	にぶい橙褐色	普通	石英、角閃石、チャート、微砂粒	図示20%	図示
18	台付甕	-	《3.5》	8.0	にぶい橙褐色	普通	石英、長石、チャート、雲母、微砂粒	図示80%	図示
19	須恵長頸瓶	-	《4.2》	-	明灰色	良好	石英、長石、黒色粒	図示15%	覆土、南比企?
20	須恵円面硯	-	《3.2》	(16.6)	灰白色	やや悪	石英、長石、雲母、黒色粒	図示7%	覆土、末野



第20图 3号住居跡出土遺物

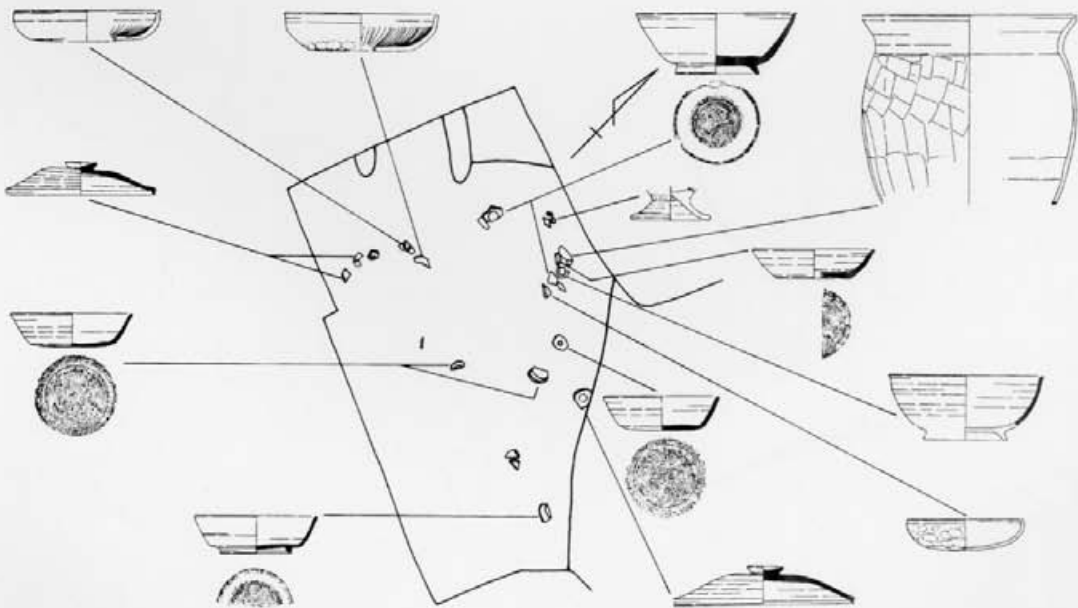
0 10cm



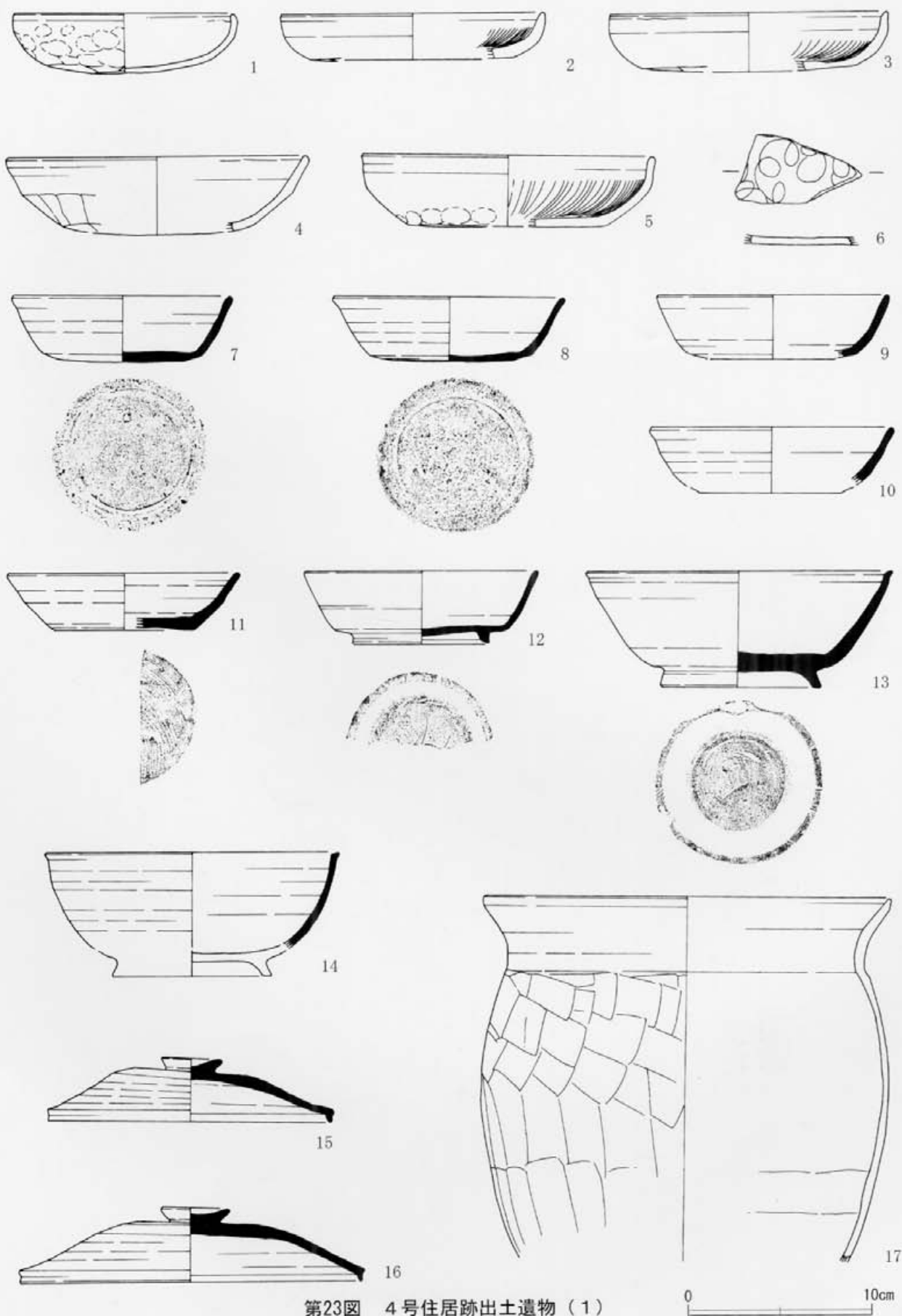
第21図 4号住居跡及びカマド実測図

4号住居跡及びカマド土層説明

- 1 表土
- 2 灰褐色土 ローム粒子、焼土粒子少量含む。粘土ブロック多量含む。
- 3 暗茶褐色土 ローム粒子微量、焼土粒子、炭化物粒子、粘土ブロック少量含む。しまり、粘性なし。
- 4 赤褐色土 ローム粒子、炭化物粒子微量、焼土粒子多量含む。しまり、粘性あり。
- 5 暗茶褐色土 ローム粒子、粘土ブロック少量含む。しまり、粘性なし。攪乱。

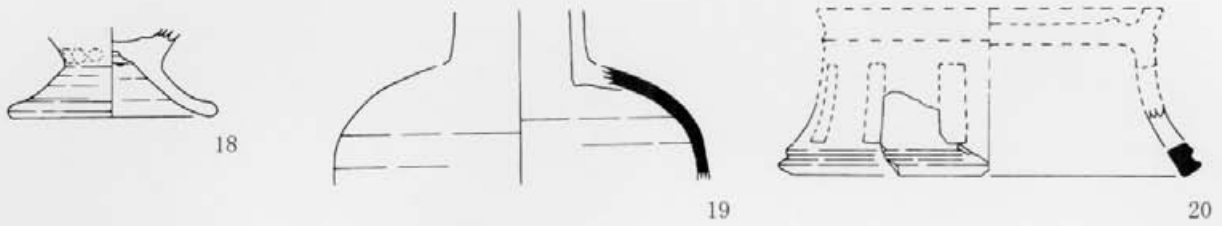


第22図 4号住居跡遺物分布状況



第23图 4号住居跡出土遺物(1)

0 10cm



第24図 4号住居跡出土遺物(2)



【5号住居跡】

A区西端に位置する。住居跡の大部分が調査区域外となっているため、遺構の全体像は不明であるが、カマド及び住居跡北西部が検出されている。

B区4号住居跡との位置関係により、両者は重複関係にあると考えられるが新旧関係は不明である。

また、5号住居跡の床面を切り込み6号住居跡が構築されている。

住居跡は、北壁のみ5.58m(カマド部分含む)が検出された。住居跡の主軸方位はN-34°-W前後と推定される。住居跡上層より攪乱部が2箇所検出されており、遺構の残存状況は悪い。周溝は、カマド付近、攪乱部を除き壁際に検出された。確認面から床面までの深さは30cm前後である。

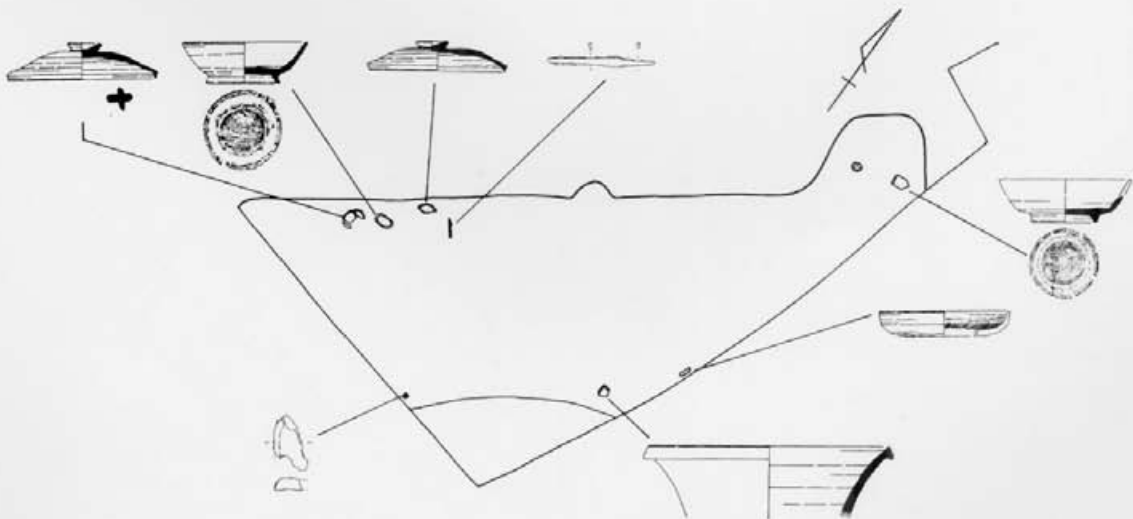
ピットは周溝内に2箇所程検出されているが、支柱穴等は不明である。

カマド東側は調査区域外となっており全体像は不明である。カマド西袖周辺は粘土により構築されている。焚口部幅60cm、燃焼部現存長96cmを測る。燃焼部の立ち上がりは緩やかである。遺物は、カマド内部、北壁際、6号住居跡との重複部付近にまとまって出土している。

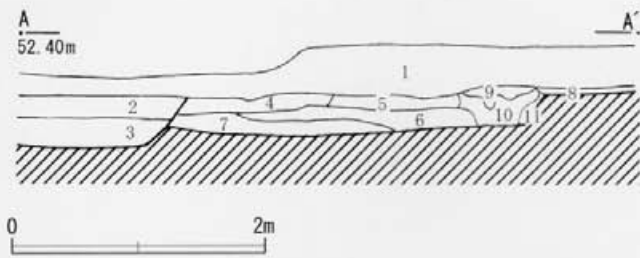
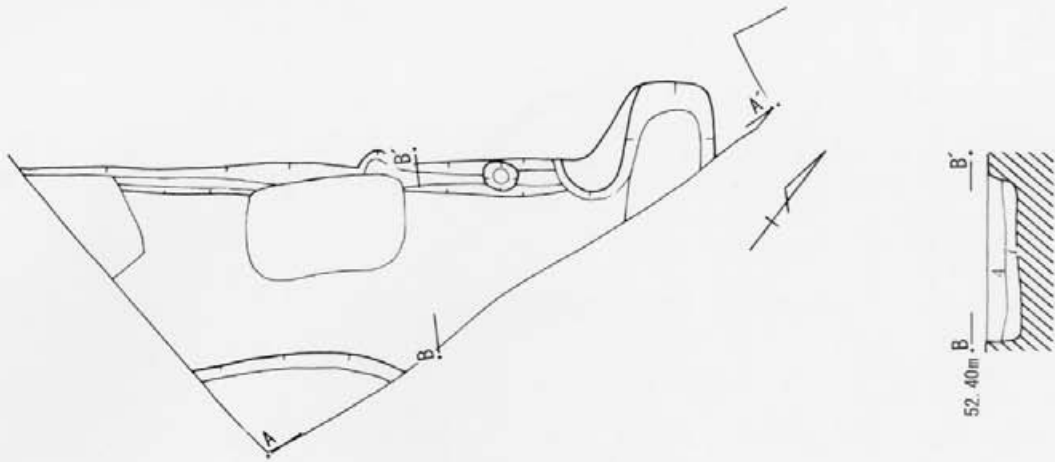
【6号住居跡】

住居跡北壁が84cm程検出されている。5号住居跡の覆土を切り込み構築されていることが判明した。

確認面から床面までの深さは12cmである。遺物等は検出されなかった。



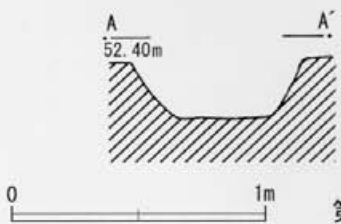
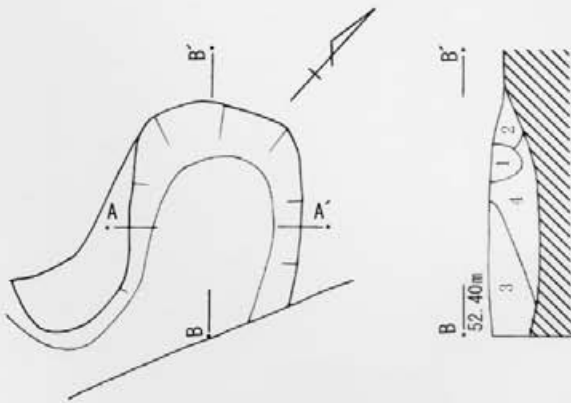
第25図 5号住居跡遺物分布状況



5号・6号住居跡土層説明

- 1 表土
- 2 暗茶褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。
- 3 暗茶褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
(2、3層は、6号住居跡覆土)
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック主体。粘性あり。
- 5 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
- 6 " ローム粒子少量、焼土粒子微量含む。
- 7 暗黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。
- 8 茶褐色土 ロームブロック主体。しまりなし。
- 9 暗褐色土 ローム粒子微量、粘土ブロック少量、焼土粒子微量含む。
- 10 " ローム粒子少量、粘土ブロック少量、焼土粒子微量含む。
- 11 灰褐色土 粘土ブロック主体。しまり、粘性あり。

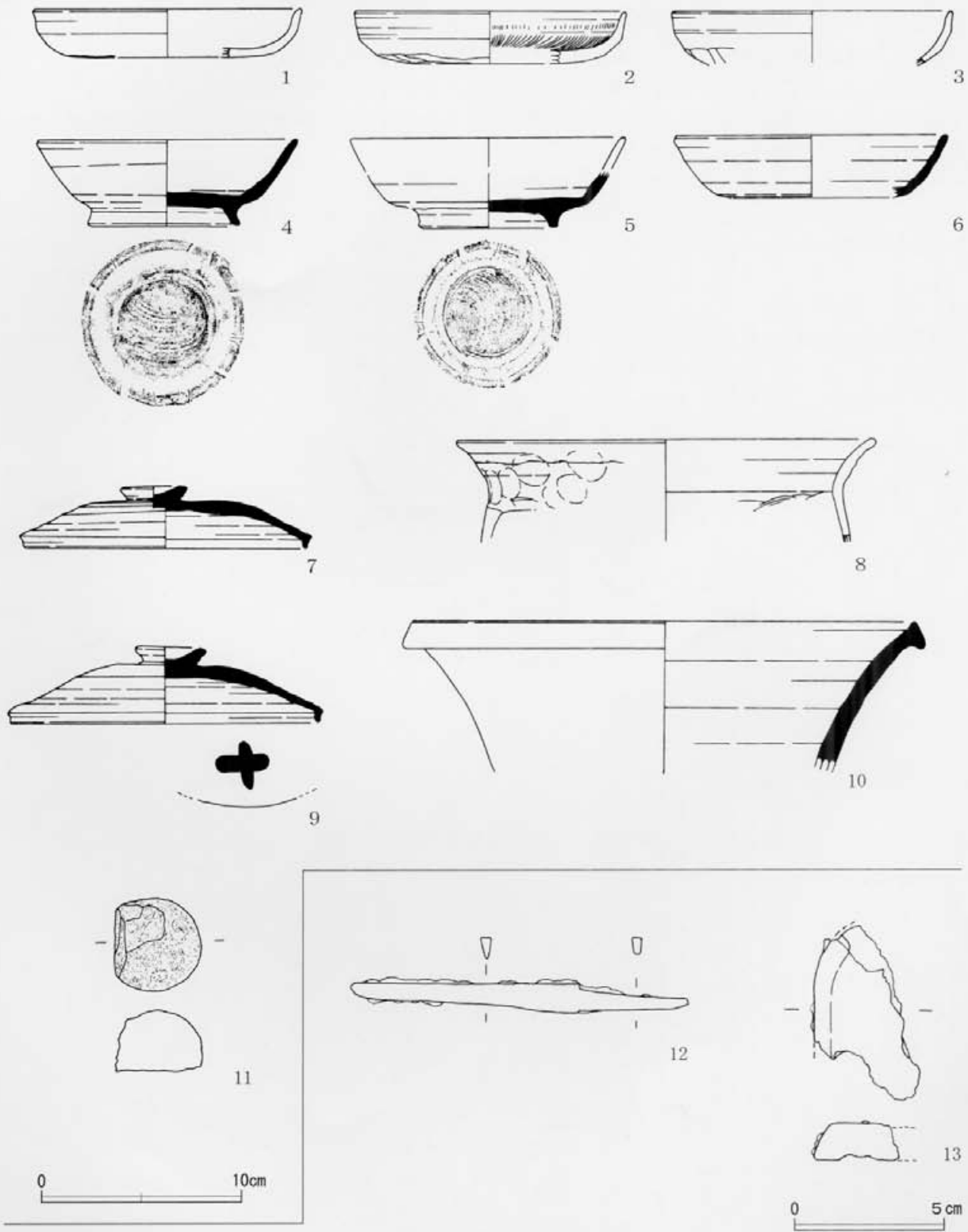
第26図 5号・6号住居跡実測図



5号住居跡カマド土層説明

- 1 暗茶褐色土 ローム粒子、焼土粒子微量含む。
- 2 赤褐色土 焼土粒子、粘土ブロック多量、炭化物粒子微量含む。
- 3 明茶褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
- 4 灰褐色土 白色粘土多量、ローム粒子少量含む。
しまり、粘性あり。

第27図 5号住居跡カマド実測図



第28图 5号住居跡出土遺物

【1号掘立柱建物跡】

A区北端に位置する。柱穴はP1～P4までが確認されている。主軸方位はN-40°-Eである。P1が、1号住居跡の床面下から検出されていることから1号住居跡より古いことが確認されている。いずれの柱穴にも柱痕が明瞭に確認できた。平面形は、P1は略楕円形、P2～P4は不整形となっている。建物跡の大部分は調査区域外となっていることから規模は不明であるが、柱間寸法は2.40m等間である。遺物は、柱穴内から須恵器・土師器破片が検出されている。

【2号掘立柱建物跡】

A区東端に位置する。主軸方位はN-45°-Wとなる。柱穴はP1～P4までが確認されている。いずれのピットともに1号掘立柱建物に比較

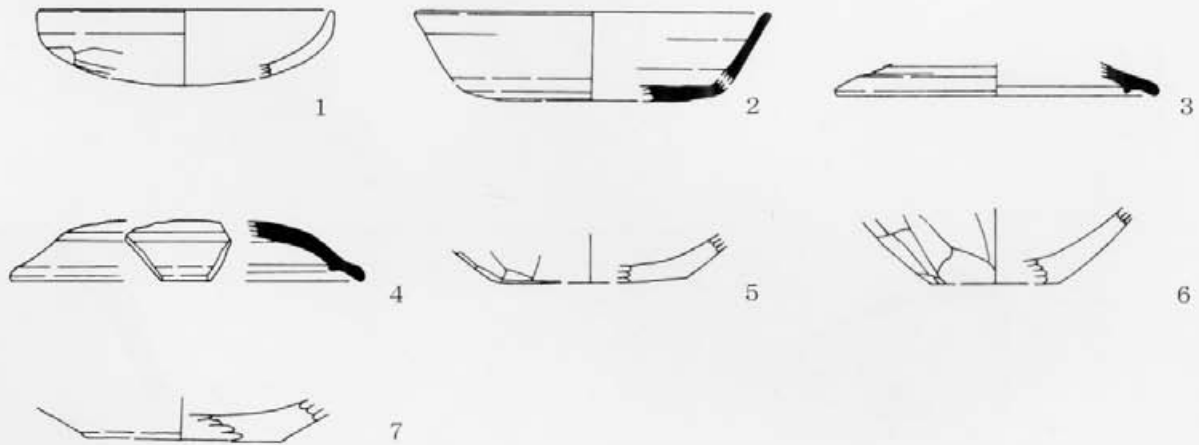
し、小型である。1号住居跡と重複関係を有しており、1号住居跡覆土・床面では、本建物跡の痕跡は認められなかったことから本遺構の方が先行すると考えられる。

柱間寸法はP1～P3までは、1.95m等間、P3～P4は1.50mである。遺物等は検出されなかった。

【3号掘立柱建物跡】

A区西端に位置する。柱穴はP1、P2が確認されている。柱間寸法は1.50mである。主軸方位はN-22°-W程であろう。

大部分が調査区域外となっているため全体像は不明であるが、ここでは掘立柱建物跡として報告しておく。



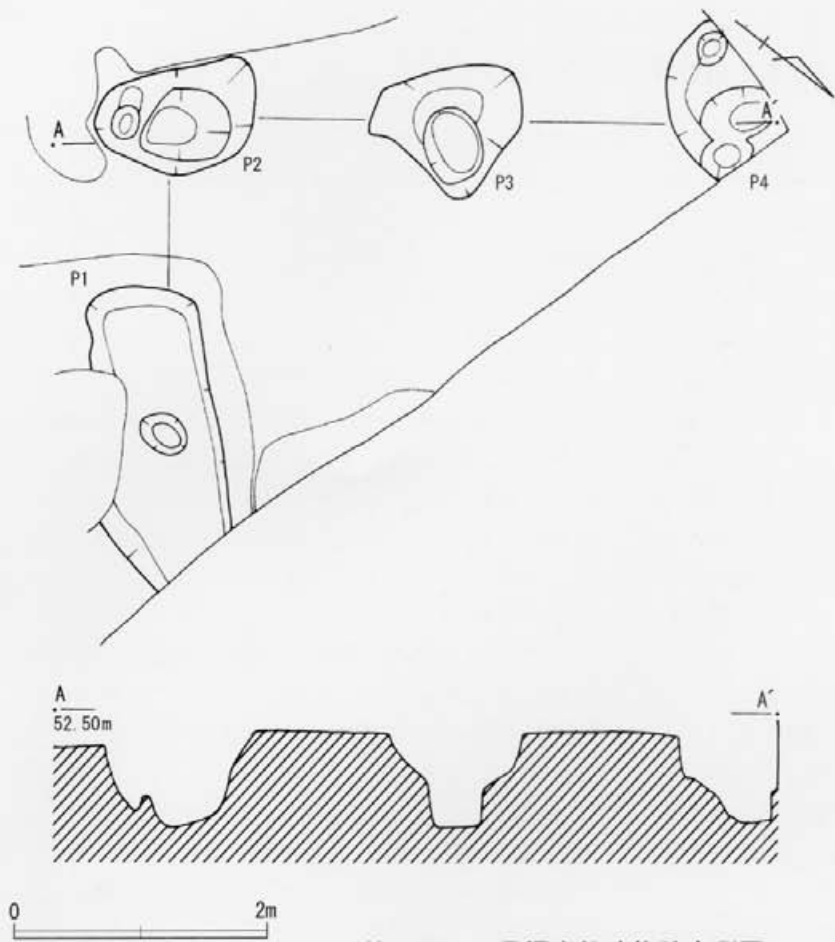
第29図 1号掘立柱建物跡出土遺物

5号住居跡出土遺物観察表

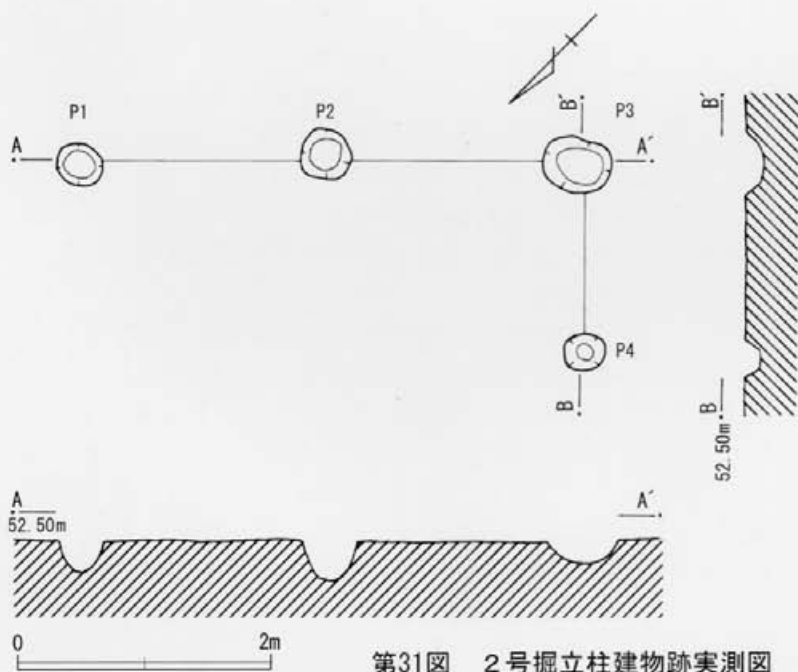
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	杯	(13.2)	(2.4)	-	にぶい橙褐色	やや悪	石英、パミス、雲母、微砂粒	図示10%	覆土、磨滅
2	杯	(13.4)	(2.6)	-	赤褐色	良好	微砂粒	図示40%	図示、内面放射状暗文
3	杯	(13.8)	(2.7)	-	明褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒、酸化鉄粒	図示15%	カマド覆土、磨滅
4	須恵高台付杯	12.7	4.3	7.4	明灰色	普通	石英、片岩、黒色粒	95%	図示、末野
5	須恵高台付杯	-	(2.8)	6.8	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示70%	図示、末野
6	須恵杯	(13.6)	(3.1)	(8.8)	灰白色	普通	石英、黒色粒、海綿骨針	図示15%	張り床、南比企
7	須恵蓋	14.0	3.1	-	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒、細礫	99%	図示、末野
8	須恵蓋	16.3	3.8	-	淡灰褐色	普通	石英、長石、褐色粒	95%	図示、内面に(十)の墨書あり、末野
9	甕	(20.6)	(5.1)	-	橙褐色	普通	石英、雲母、微砂粒	図示20%	カマド覆土
10	須恵甕	(24.8)	(7.4)	-	灰黒色	良好	石英、長石	図示10%	図示、内外面に降灰輪
11	磨石	長さ4.6	幅4.3	厚さ3.1	重さ39.6g	-	石質・角閃安山岩	70%	覆土、球形で磨痕あり
12	刀子	長さ11.2	幅1.0	厚さ0.4	重さ8.0g	-	-	100%	図示
13	不明鉄製品	長さ5.8	幅3.6	厚さ1.2	重さ28.8g	-	-	-	図示、亀裂が著しい、鋳造品か

1号掘立柱建物跡出土遺物観察表

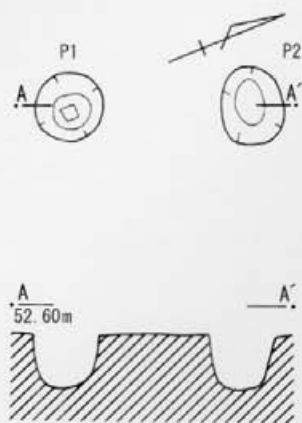
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	杯	(11.4)	(3.0)	-	明褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示15%	P-3覆土
2	須恵杯	(13.8)	(3.5)	(10.0)	淡灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示10%	P-2覆土、南比企
3	須恵蓋	(12.5)	(1.3)	-	淡灰色	普通	石英、長石、黒色粒、チャート	図示10%	P-1覆土、末野
4	須恵蓋	(13.8)	(2.4)	-	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示10%	P-3覆土、末野
5	甕	-	(1.9)	(7.6)	明灰褐色	普通	石英、長石、パミス	図示25%	P-2覆土
6	甕	-	(3.0)	(5.0)	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒、雲母	図示20%	P-3覆土
7	甕	-	(1.7)	(7.4)	にぶい灰褐色	普通	石英、長石、雲母	図示20%	P-3覆土



第30图 1号掘立柱建物跡实测图



第31图 2号掘立柱建物跡实测图



第32图 3号掘立柱建物跡实测图

IV 考 察

北武蔵型暗文杯の法量分化と変遷～熊野遺跡理解のために

1) はじめに

埼玉県北部地域、特に榛澤・幡羅郡域とその周辺地域には、7世紀後半段階に内面に暗文を有する極めて特色ある土器群が成立する。これらの土器群については、既にいくつかの論考がある。

これらの見解の一致するところとして、北武蔵型暗文杯は、畿内産土師器杯の影響を受けて成立すること、従来在地では確認できなかった法量分化が見られることがあげられる。

一方、熊野遺跡は、既にいくつかの検討を行ったように初期評家としての性格を有していると考えているわけであるが(鳥羽2004他)、7世紀後半段階における土器の出土量は、東国全体を見渡しても豊富な部類にはいる。

当遺跡における土器の様相を検討することは、律令体制成立期における在地社会の様相を明らかにすることにも繋がるものであろう。熊野遺跡では、北武蔵型暗文杯の出土量は豊富であり、さらに、その様相を知る上で極めて重要な報告例が相次ぐ状況となっている。

そこで、本稿では北武蔵型暗文杯の法量分化と変遷について、若干の検討を行い熊野遺跡の性格を考える上での一助とすることを目的としたい。

2) 基準資料の概要

①熊野遺跡131次調査1号住居跡出土土器(鳥羽・竹野谷2001)

熊野遺跡成立期を端的に示す遺物群である。在地産土師器、畿内産土師器、末野産須恵器、湖西産等の他地域からの搬入須恵器から構成される。

畿内産土師器は、杯C、皿、鉢Aが出土している。杯Cの径高指数は34であり、飛鳥Ⅱ期後半のものに近い。伴出する鉢Aも飛鳥水落遺跡(西口他1995)出土のものに近似することから全体的に飛鳥Ⅱ期後半段階のものが搬入された状況が確認された。飛鳥水落遺跡は、660年、中大兄皇子が造った漏刻の遺跡であり、その機能した年代は、近江遷都の667年か、大津宮で漏刻が造られた671年頃であることから、下限の年代をとっても7世紀第3四半期後半を中心とする年代が考えられる。

また、須恵器杯については、末野産須恵器杯Gが主体となる。杯Gの口径は8.0～9.5であり、やはり飛鳥水落遺跡のそれに近いことから、前述の畿内産土師器の年代観と整合するものであろう。

法量では、最小のものが口径8.6cm、器高3.0cmである。最大のは口径17.8cm、器高7.4cmとなる。器形は、体部が半球形のもので主体となる。

また、本段階から北武蔵型暗文杯の器形を有しながらも、暗文が施されない土器が定量存在することが確認された。径高指数も、本段階の暗文杯のものに近い。これらの資料は、従来明確ではなかったが、富田和夫氏の検討により注目されるに至る(富田2002)。

ここでは、北武蔵型暗文杯最古の段階から存在するという点を確認しておく。

②熊野遺跡108次調査1号住居跡出土土器

(宮本・竹野谷2007)

在地産土師器・末野産須恵器・他地域からの搬入須恵器からなる。

北武蔵型暗文杯は、熊野遺跡131次調査出土資料に比較し、小型品(I～Ⅲ)が欠落しており、逆に大型品が追加された(X)。また、半球形(131次)→扁平化(108次)の形態の変化が顕著となる。杯IV～Xまでの代表的な土器の径高指数は、平均すると31前後であり、131次段階に比較し、扁平化が進行したことが、この点からも窺える。また、前段階に比較し、断面がやや厚めとなり、重量観が増す傾向を有す。

③熊野遺跡A区2号特殊土坑(富田2002)

在地産土師器・畿内産土師器・末野産須恵器・他地域からの搬入須恵器からなる。

畿内産土師器は杯Aであり、平城Ⅰのものとなるので、7世紀末～8世紀初頭の年代がひとつの目安となる。

北武蔵型暗文杯は、108次調査出土資料よりさらに扁平化の傾向が強まることがあげられる。径高指数は、29前後となる。また、本遺構では、底部が平底となる暗文杯の出現が認められることから、より新しい段階への移行を示す土器群も含まれていると考えられる。

④熊野遺跡114次調査出土の暗文杯について

114次調査出土の暗文杯については、前述の各

遺構に比較し非常に少ない。図化可能なものをあげると1号住居跡1点、2号住居跡1点、4号住居跡4点、5号住居跡1点である。これらのあり方から先述した基準となる遺構とは性格等も異なるものと考えられる。熊野遺跡内での出土量の差がどのような意味を有するのかは、現状では明確な答えは出ていない。この点を検討することは、今後の大きな課題であると思われる。

また、1号、2号住居跡の暗文坏は、108次段階、4、5号住居跡の暗文坏は、A区2号特殊土坑で微量に検出された平底傾向の土器が、さらに大きく変化したものであろう。A区2号特殊土坑以降の暗文坏の平底化という大きな変化は、既に指摘されているが(富田2002)であるが、8世紀代中頃～後半にかけて在地社会を考える上で、今後重要な問題となるであろう。

3) 北武蔵型暗文坏の特徴

以上、各住居跡の北武蔵型暗文坏を中心に記述を行った。これらの住居跡の年代観について見ると、131次調査1号住居跡は、富田氏のI期古相に相当する。

108次調査区については、暗文坏の様相からすれば、明らかに131次調査より後出的であり、A区2号特殊土坑より古相を示す。ただし伴出する須恵器類を見るとA区2号特殊土坑と大きな変化がなく、時間的には近接した時間に収まるものである。この状況は、土師器・須恵器の変化が均一に進行したものではないことを示している可能性を有する。以上の土師器、須恵器の対応関係・実年代の検討は、今後の課題としても、北武蔵型暗文坏の131次調査1号住居跡→108次調査1号住居跡→A区2号特殊土坑という北武蔵型暗文坏の変化をここで確認しておきたい。

また、北武蔵型暗文坏については、最大I～XIの法量分化が認められた。それぞれの段階において、径高指数が著しく異なるものや暗文の施文法が異なるもの(格子状暗文)があることから、同一系列のものであるか疑わしい存在もある(131次1号住Na.37、A区2号特殊土坑Na.198、202)が、その他の土器群については、それぞれの住居跡に

おいて近似した径高指数を有することからほぼ同一器形の法量分化と考えられる。畿内産土師器坏Cの分析では、西弘海氏によりI～IVの分化が示されており、銅椀模倣の重椀構造(西1978)が、東国の熊野遺跡で、より鮮明に確認できた点は、重要な成果であろう。

4) 評家の形成と土器

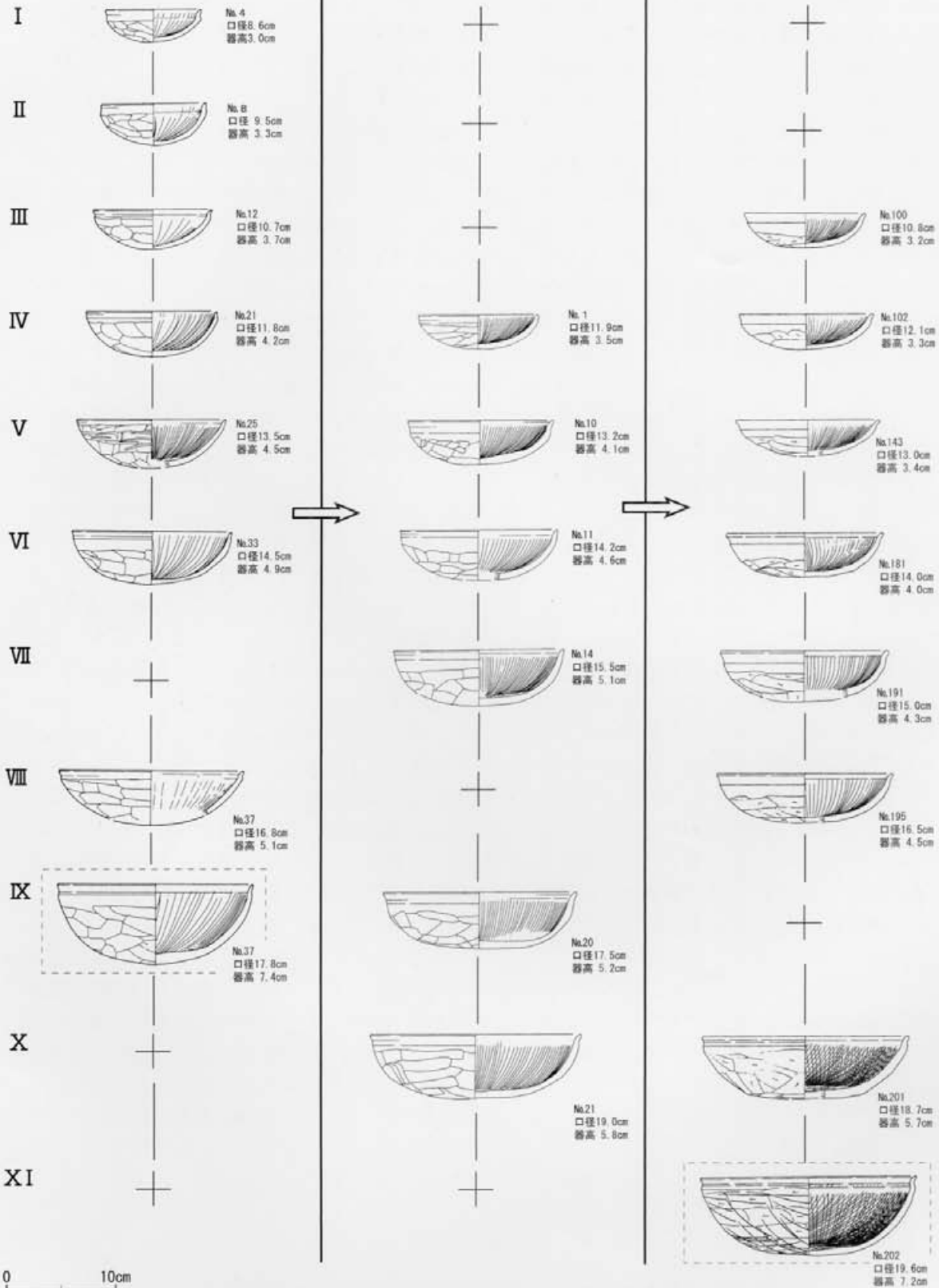
熊野遺跡では、遺跡の成立とともに、北武蔵型暗文土器が成立し、畿内産土師器坏が搬入される。また、榛澤郡内に位置する末野窯では、古墳時代的な坏Hから坏Gへの生産がはじまる(赤熊・大谷2006)。これらの事象は、すべて連動するものであり、出土遺物から、律令時代の幕開けを示す証左となるものである。北武蔵型暗文坏の器種分化は、今のところ熊野遺跡だからこそ明確に確認できるものと思われる。北武蔵型暗文坏が盛んに生産される地域は、現在のところ榛澤・幡羅郡域と考えられる。最も需要が大きかったのは、評家または、その他の官衙である。今後、幡羅郡(評)家においても同様な事例が確認できるであろう。おそらく、畿内での食器組成を模倣し、再現することに重要な意義があったものと推定する(鳥羽2004)。

ただし、北武蔵地域のように顕著な模倣が確認できる地域は、東日本では皆無に近く、この点から北武蔵地域の特殊性が認められる。北武蔵の特殊性を考える上で参考となる事象として宮城県大崎市周辺の調査成果が参考となる。名生館官衙遺跡では、熊野遺跡で定量存在する暗文施文を省略した北武蔵型暗文坏の搬入品もしくは模倣品が出土し、大崎平野周辺の経営に北武蔵地域の人々が関与した可能性が高いことが指摘されている(高橋2007)。北武蔵地域が担った役割の一端が土器から明らかにされた一例である。その役割の重要性ゆえ畿内政権も北武蔵地域との交流・連携を深めることが必要であったと考えられる。金属器指向・畿内指向の強い北武蔵型暗文坏がいち早く成立し、評家などの官衙周辺で多量に出土する背景の一端は、このような事情によるものと考えられる。

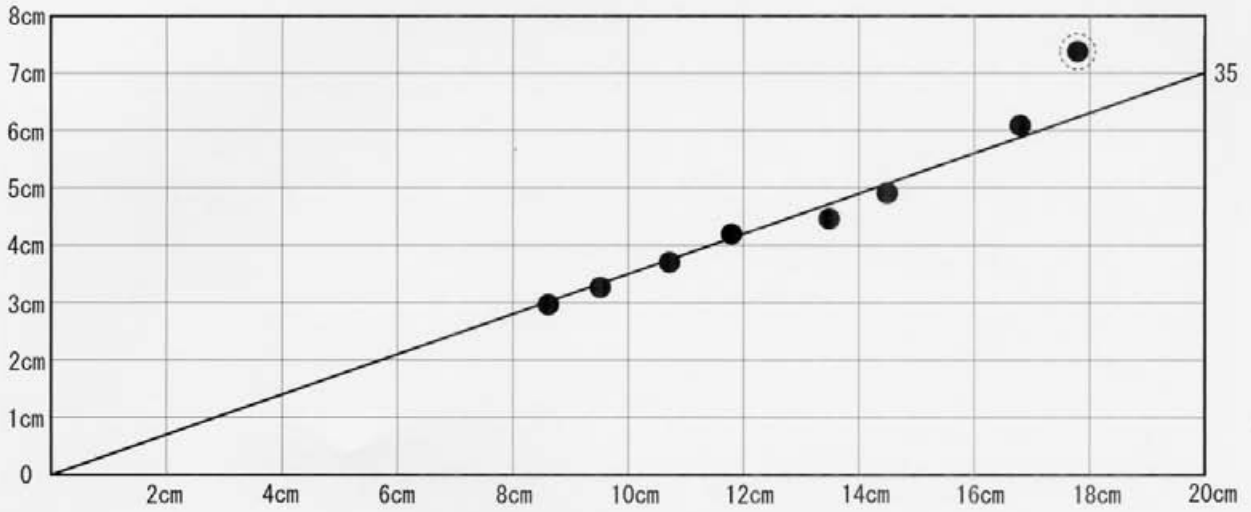
熊野遺跡131次1号住居跡
(岡部町2001・熊野遺跡I)

熊野遺跡108次1号住居跡
(深谷市2007・市内遺跡XIV)

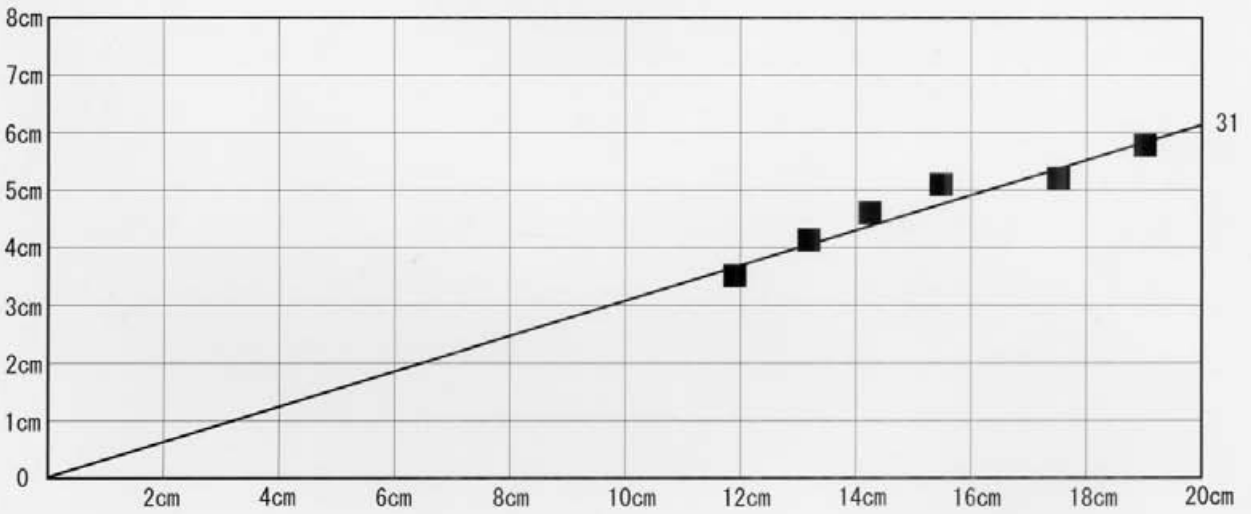
熊野遺跡A区2号特殊土壌
(埤埋文2002・熊野遺跡A・C・D区)



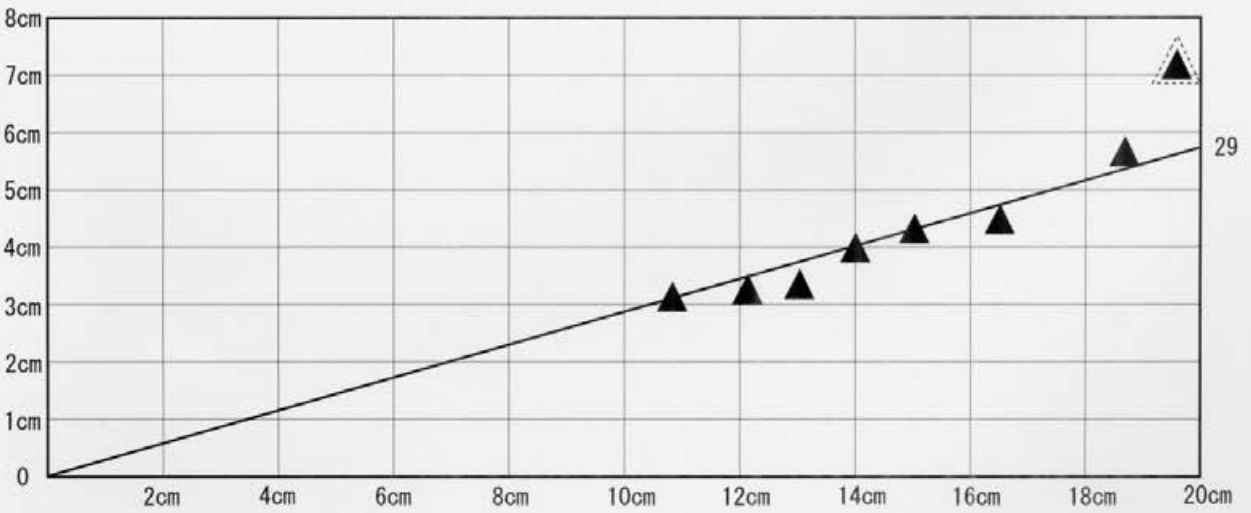
第33図 熊野遺跡における北武蔵型暗文土師器杯の法量分化と変遷



第34図 熊野131次調査 1号住居跡



第35図 熊野108次調査 1号住居跡



第36図 熊野遺跡A区 2号特殊土壌

報告書抄録

ふりがな	ふのいせいないせき							
書名	深谷市内遺跡ⅩⅤ							
副書名								
シリーズ	深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第94集							
編著者名	鳥羽政之							
編集機関	深谷市教育委員会							
所在地	〒366-0823 深谷市本住町17番地3 TEL 048(572)9581							
発行日	平成20年3月19日							
しよしゅういせき 所収遺跡	しよぎいち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
くまのいせき 熊野遺跡	さいたまけんふかやし 埼玉県深谷市 おかあざなてぼり 岡字立堀1932-7	11218	017	36° 12' 50"	139° 14' 11"	平成9年8月28日から 平成9年9月19日まで	184㎡	個人 住宅 建設
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
	集落跡	奈良～ 平安時代	住居跡6軒 掘立柱建物跡3棟		土師器 須恵器 鉄製品(刀子等) 鉄滓 石製品(砥石等) 編み物石	7世紀末～8世紀初頭 2軒 (1、2住) 8世紀中頃～後半 3軒 (4～6住) 10世紀後半 1軒 (3住) 2号住居跡は5軒の重複あり。4 号住居跡からは小破片ながら円面硯 の出土あり。		

写 真 图 版



発掘調査前の状況



表土掘削の状況



A区全景（北西から）



A区全景（南東から）



1号竪穴住居跡



1号竪穴住居跡遺物出土状況（1）



1号竪穴住居跡遺物出土状況（2）



2号竪穴住居跡完掘状況

図版 2



2 E号竪穴住居跡カマド



2 E号竪穴住居跡カマド右袖周辺



2 D号竪穴住居跡カマド



2号竪穴住居跡遺物出土状況



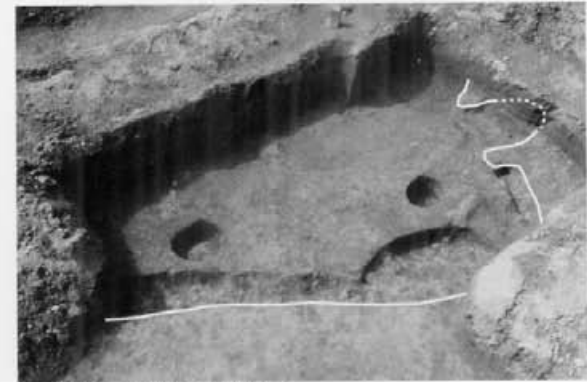
2 E号竪穴住居跡遺物出土状況



2 E号竪穴住居跡遺物出土状況



3号、4号竪穴住居跡完掘状況



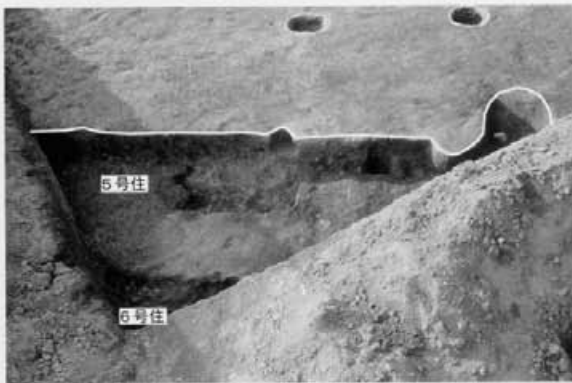
4号竪穴住居跡完掘状況



4号竖穴住居跡遺物出土状況(1)



4号竖穴住居跡遺物出土状況(2)



5号、6号竖穴住居跡完掘状況



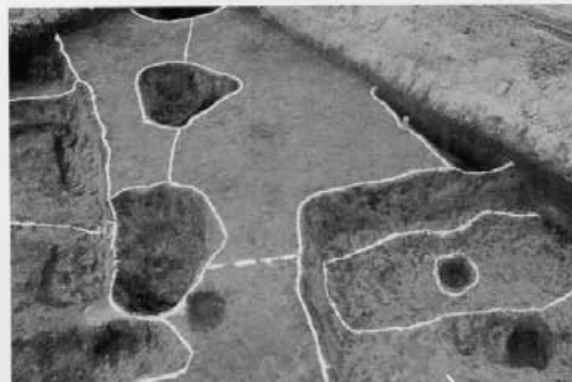
5号竖穴住居跡カマド



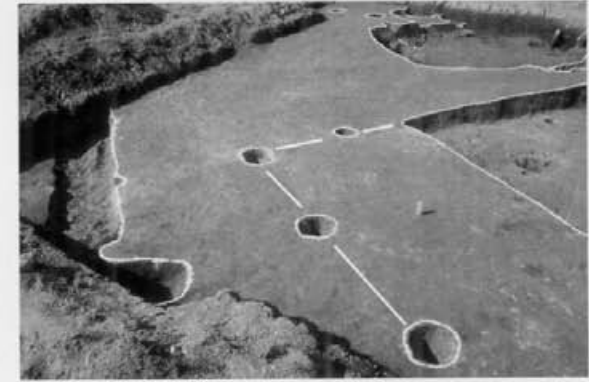
5号竖穴住居跡遺物出土状況



5号竖穴住居跡刀子出土状況



1号掘立柱建物完掘状況



2号掘立柱建物完掘状況

图版 4



1号竖穴住居跡No. 1



1号竖穴住居跡No. 2



1号竖穴住居跡No. 3



1号竖穴住居跡No. 5



1号竖穴住居跡No. 6



1号竖穴住居跡No. 7



1号竖穴住居跡No. 12



1号竖穴住居跡No. 13



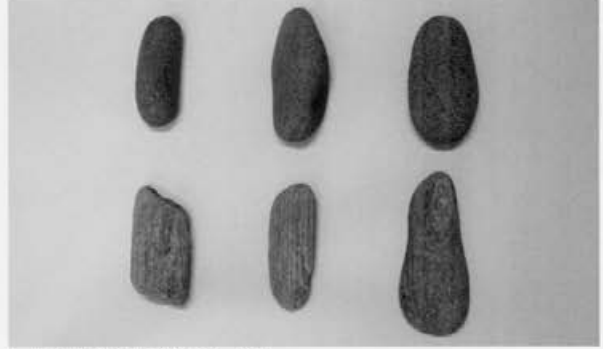
1号竖穴住居跡No. 14



1号竖穴住居跡No. 19



1号竖穴住居跡No.24



1号竖穴住居跡No.29~34



2号竖穴住居跡No. 1



2号竖穴住居跡No. 3



2号竖穴住居跡No. 4



2号竖穴住居跡No. 5



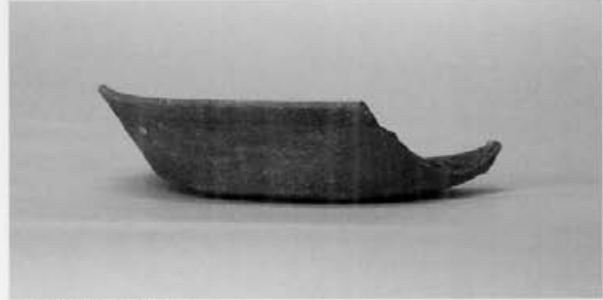
2号竖穴住居跡No. 7



2号竖穴住居跡No. 9



2号竖穴住居跡No.11



2号竖穴住居跡No.12

图版 6



2号竖穴住居跡No.18



2号竖穴住居跡No.23



2号竖穴住居跡No.24



2号竖穴住居跡No.26



2号竖穴住居跡No.32



2号竖穴住居跡No.37



3号竖穴住居跡No. 1



3号竖穴住居跡No. 3



3号竖穴住居跡No. 7



3号竖穴住居跡No. 9



3号竖穴住居跡No. 11



4号竖穴住居跡No. 1



4号竖穴住居跡No. 5



4号竖穴住居跡No. 7



4号竖穴住居跡No. 8



4号竖穴住居跡No. 11

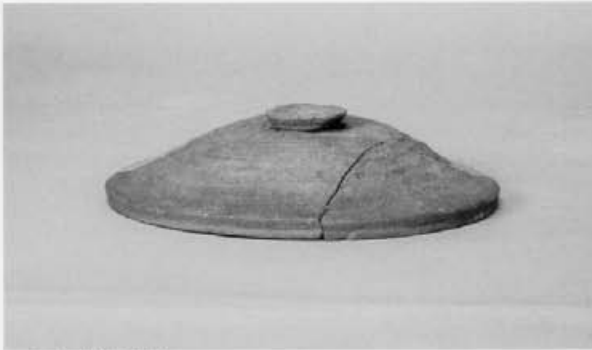


4号竖穴住居跡No. 12



4号竖穴住居跡No. 13

図版 8



4号竪穴住居跡No.15



4号竪穴住居跡No.17



4号竪穴住居跡No.18



4号竪穴住居跡No.20



5号竪穴住居跡No.2



5号竪穴住居跡No.4



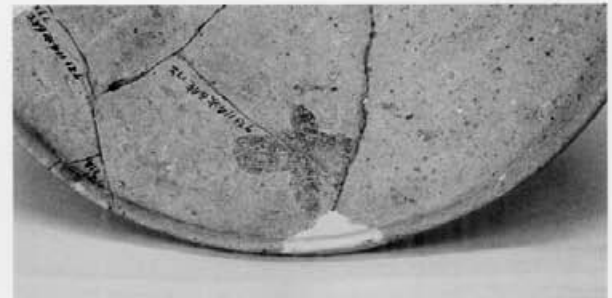
5号竪穴住居跡No.5



5号竪穴住居跡No.7



5号竪穴住居跡No.8



5号竪穴住居跡No.8内面の墨書

深谷市内遺跡ⅩⅤ

2008年3月19日

編集発行 深谷市教育委員会
埼玉県深谷市本住町17番地3